



本牧十二天宮

本牧の塙はありて真言宗多聞院

社當奉祀

と祭神ハ十二天神躰ハ海上出現と云尤佳景の地

奈川の臺より眺望せむ所の絶壁ハもあつり此

裏手小峰立せむ所の巨巖こそなりて巖頭数株の松梅

鬱蒼蒼と栄茂せむ

吾妻明神社同所六町斗南の方原宿といふあり相傳ふ

天和年間此地の獵人吉太夫といふもの此海上に網を投

當社の神躰を得とて

營建せむと云此神躰ハも南總亦更津吾妻明神の神

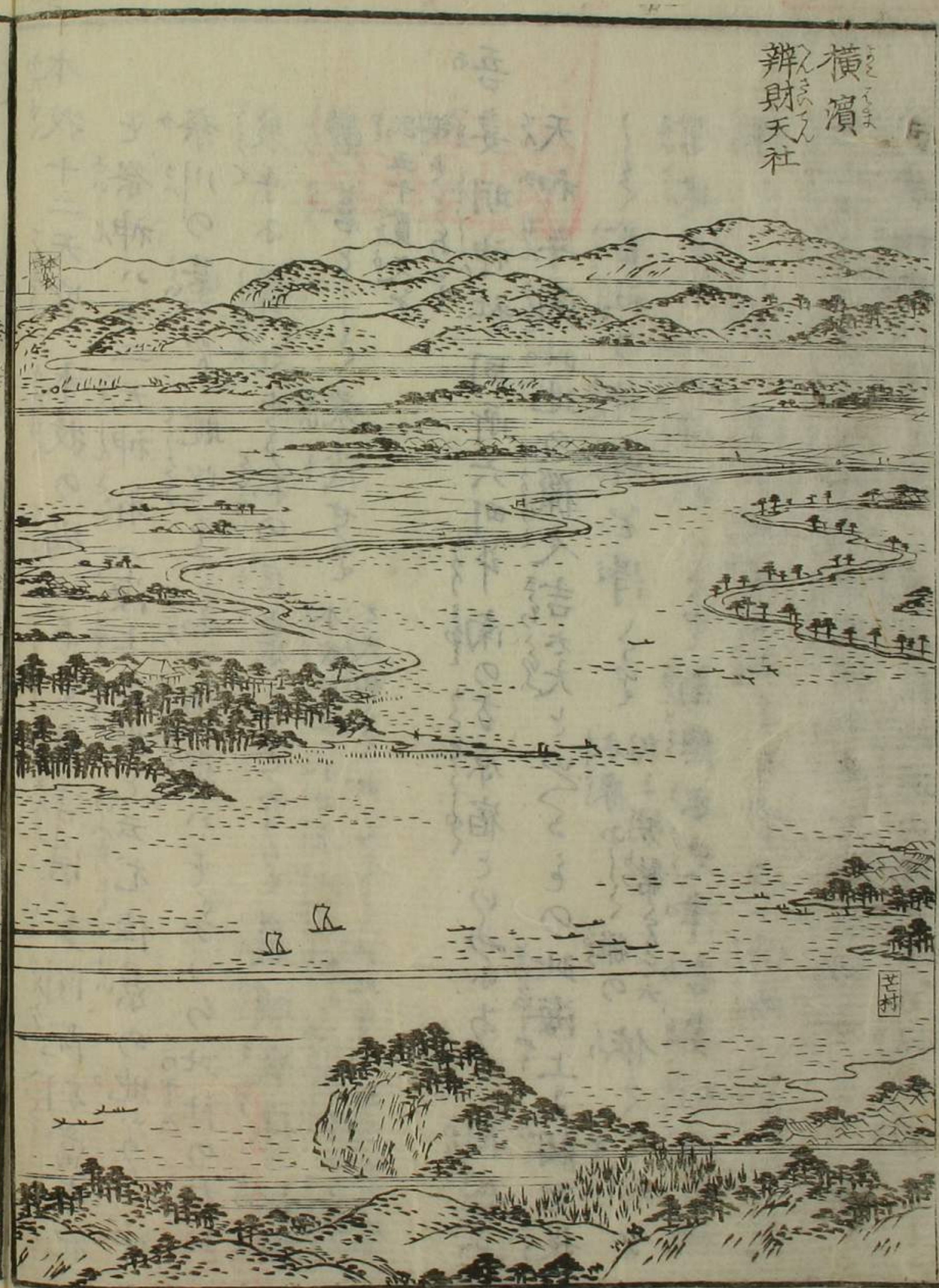
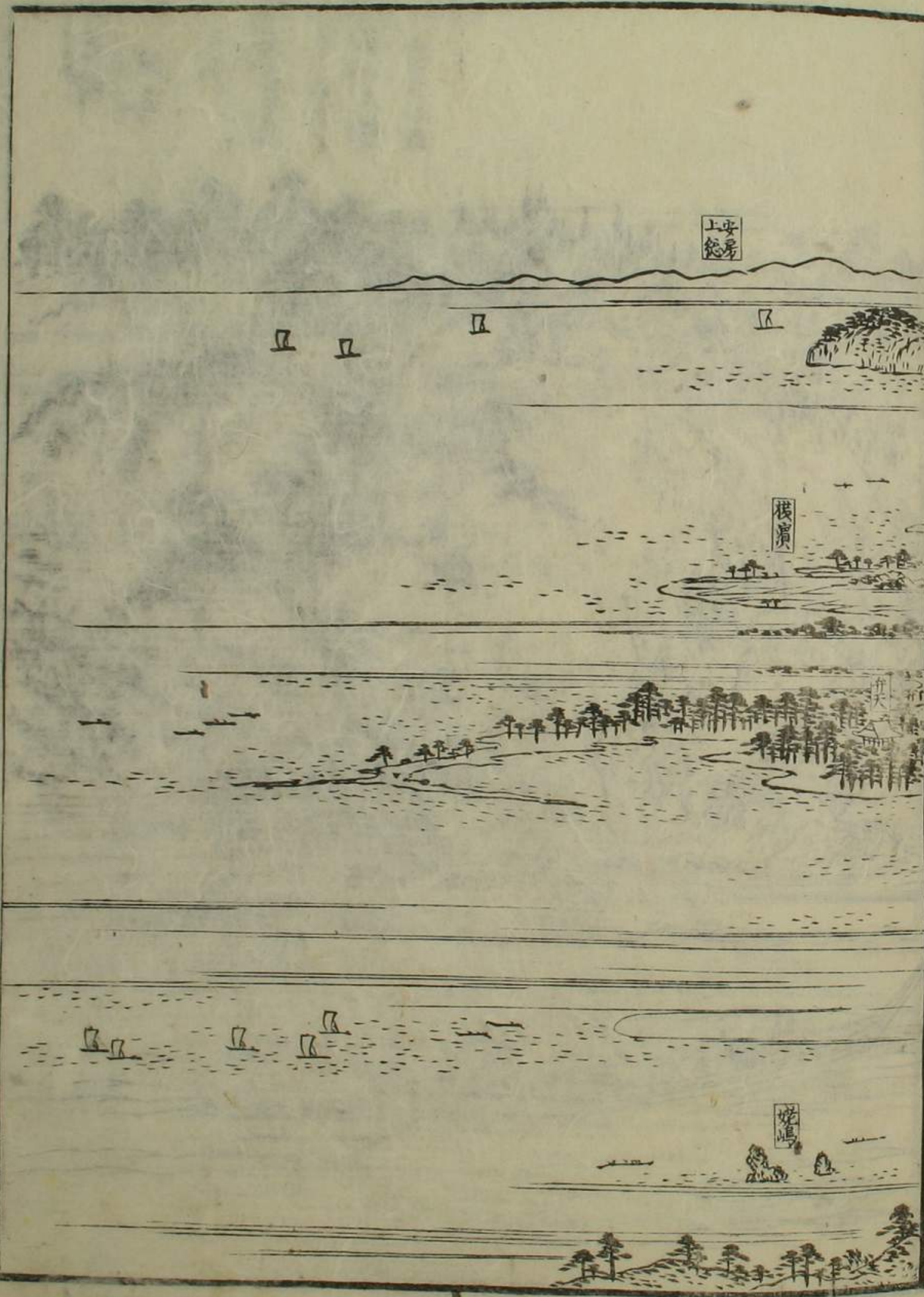
像や浪に漂ひ此地よ止まむといふ祭神ハ人皇十一代

垂仁天皇の皇子日本武尊初の御名とて小碓命と奉る

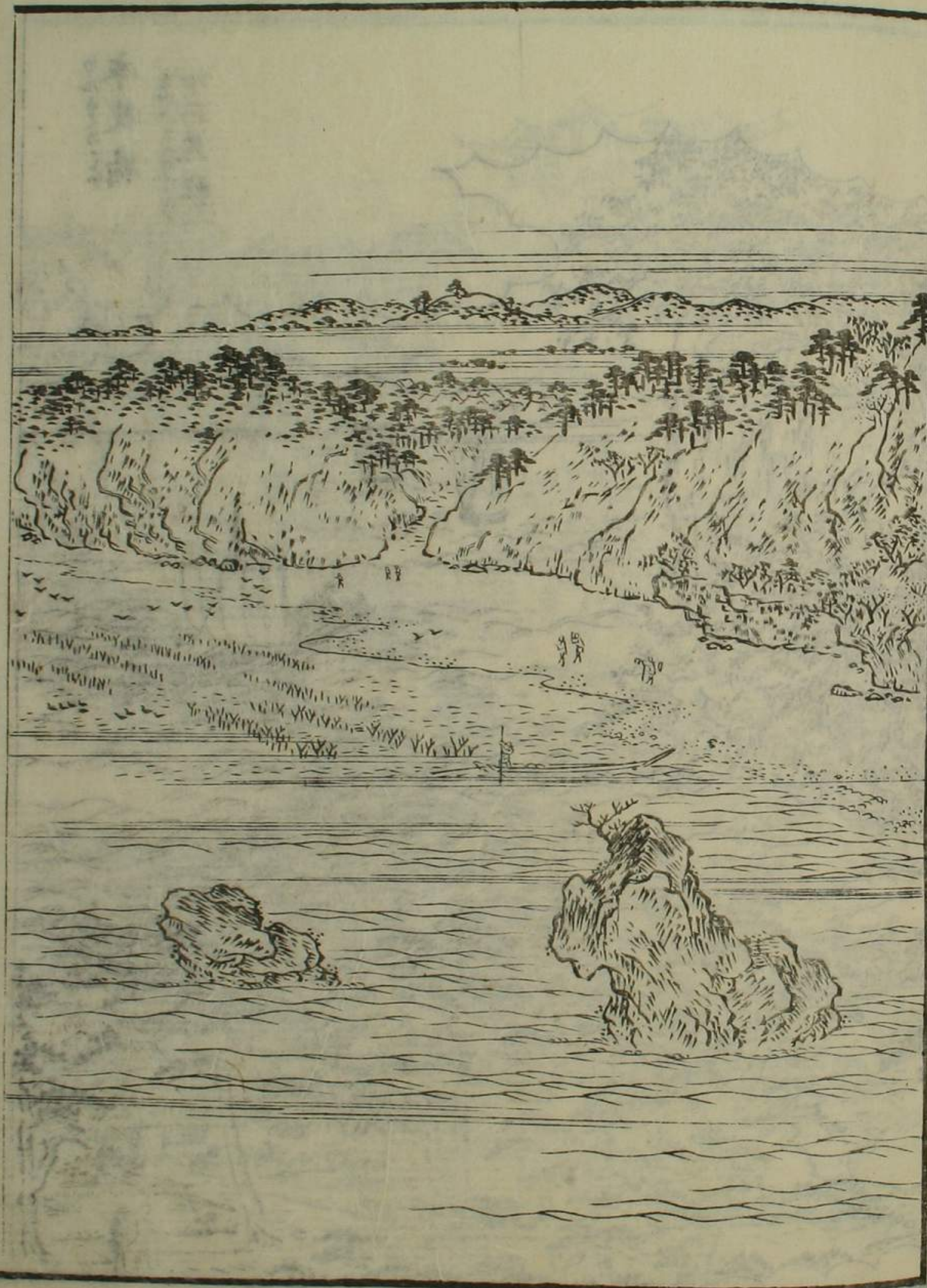
武藏相模の際と尊の東征御經過の地とて以て所々

本牧の地ハ川田原北奈家の分限帳に左條の
太夫領せむ由んえむ此地や百世文同橋本

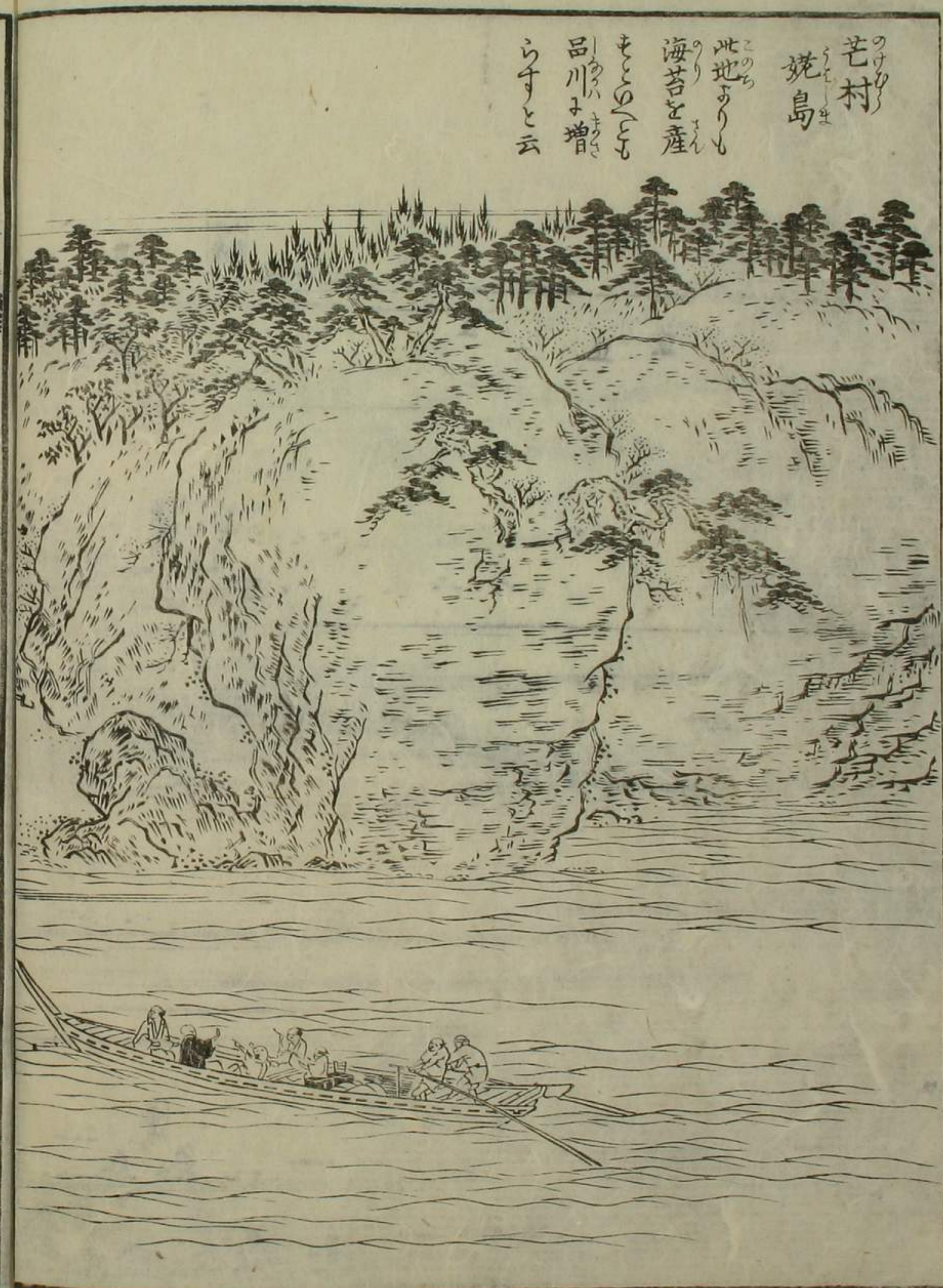




横濱
辨財天社

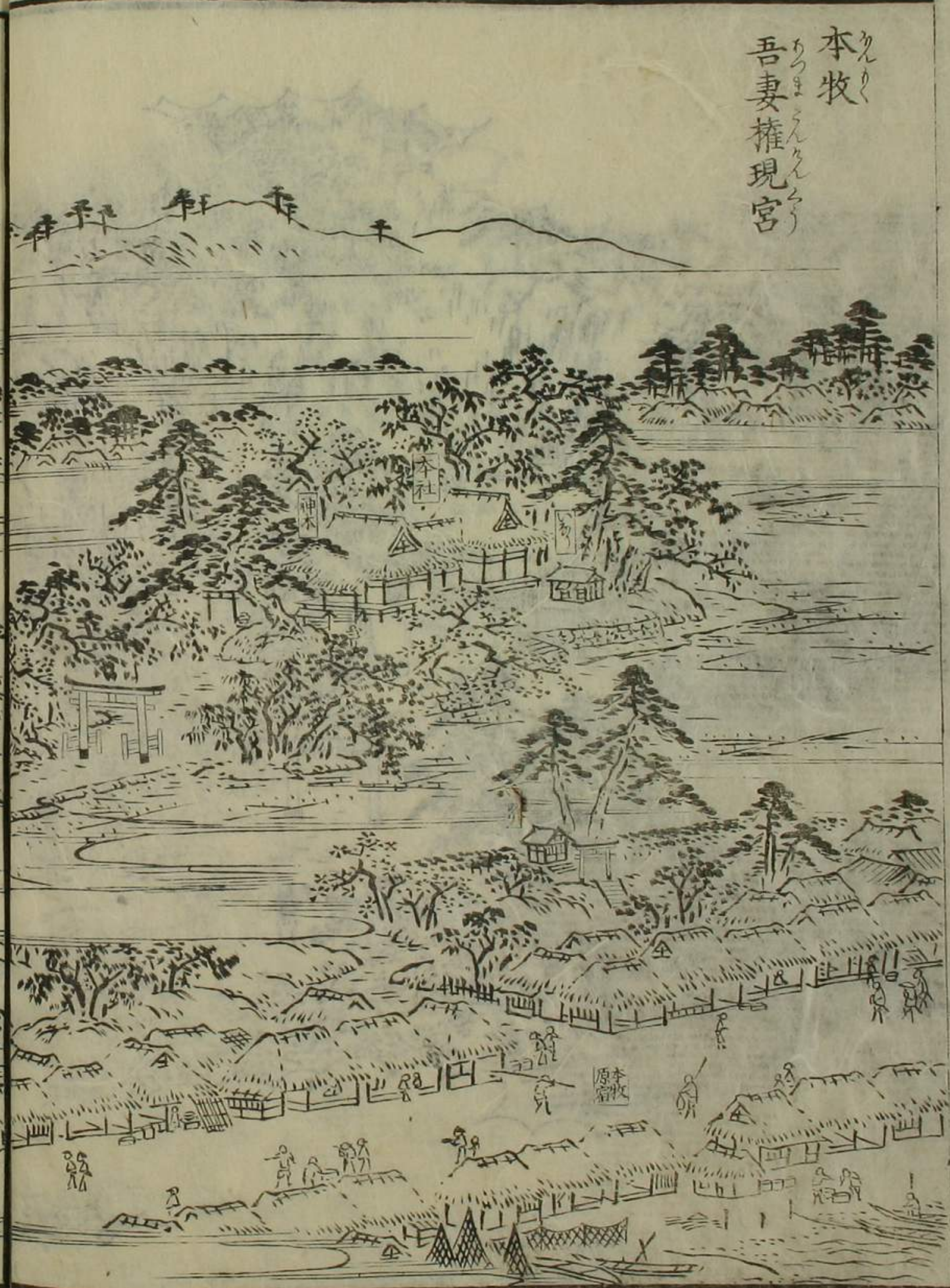


つゆり
芒村
焼島
此地ありし
海苔を産
まるといふ
呂川子増
らすと云



わんむのまか
本牧塙
あふみてんのすう
十二天社







本牧の地ハ
 神奈川澤の
 南に續き
 海と小鏡
 一方の東北
 勝區
 探る人
 乃とある小取
 又へり按む
 本牧の名
 昔時牧馬の地
 うらゆふの糸
 海利魚鹽の湖と
 漁人の家
 魚とれて東海の
 澤谷及び東郷村
 市少々輸り
 鬻ぐらう

奉祀して千歳御神威を仰ぎ奉る鎮護國家の盛功未
 代よ及りぬの故あるへ
 杉山神社新町より八町あり北の方下星川村より延喜
 式内の神社中々靈蹟尤揭然たり今日蓮宗法性寺と
 いふより兼帯奉祀して釋迦如来を本地佛とて例祭ハ
 毎年六月十四日は修行屯
 延喜式神名帳曰 都築郡一座小

續 杉山神社 日本後紀第七曰
 美和五年二月庚戌武藏國都築郡粉山神社預之
 同 官書曰 五年五月庚辰奉授武藏國无位杉山名神從
 五位下
 按小判本の續日本後紀粉山は作を誤なり

惟子里芝生の南に並み往古ハ宿驛の名なりし今ハ程谷
 驛に加へりし小地名とあり
 此所を下惟子と名け岩間
 神戸の南にあるを上惟子と



杉山明神社
延喜式内都築
郡杉山神社是
なり

新入寛永五年齊藤徳元の関東下向記に所の人小此里の君のつれと尋てくは海辺にありあり浦のありあなむとくかく名村と云

平安記行 かてゆくと若つとる所あり

日ゆるまかてとてゆきと旅人の汗みあふかてゆの里 持資

田園雜記 くの宿とてまゝあり 道奥 准后

つはきと旅の衣とてまゝあり 旅の衣とてまゝあり

鎌倉記行 かこの里のまゝあり 旅の衣とてまゝあり

地白あり 旅の衣とてまゝあり 譚庵

惟子川 下惟子の南新町驛舎の入口と流る 川幅十五間 此流

小架を板橋と惟子橋と号く此川ハ同國都築郡白根の

辺よりゆき此地小至る下流ハ久良岐郡戸部村に経る

海小會を

程ヶ谷新町 東海道官驛の一なり 惟子町上下岩間町上下神戸町

神奈川より此地迄行程二里九町あり 驛亭軒と連糸繫

昌の地

神戸川 神戸と上惟子との間の小川あり長二間と号く此板

橋を架しと号く 神戸橋と号く 水源ハ田間の水落集を流

まをなす新町より右の裏を流ま此地に至る末ハ神戸岩

間の左の裏を回りて惟子川に入

大神宮 神戸の地小あり 街道の右側ハ鳥居を建侍大門

三丁あまりを入り社あり 神主岡田氏奉祀を祭礼ハ六月

九月両月の十六日中より九月を大祭の辰とを相傳ふ往古

當社の御神武州御厨庄榛谷峯ハ影向なりあひと

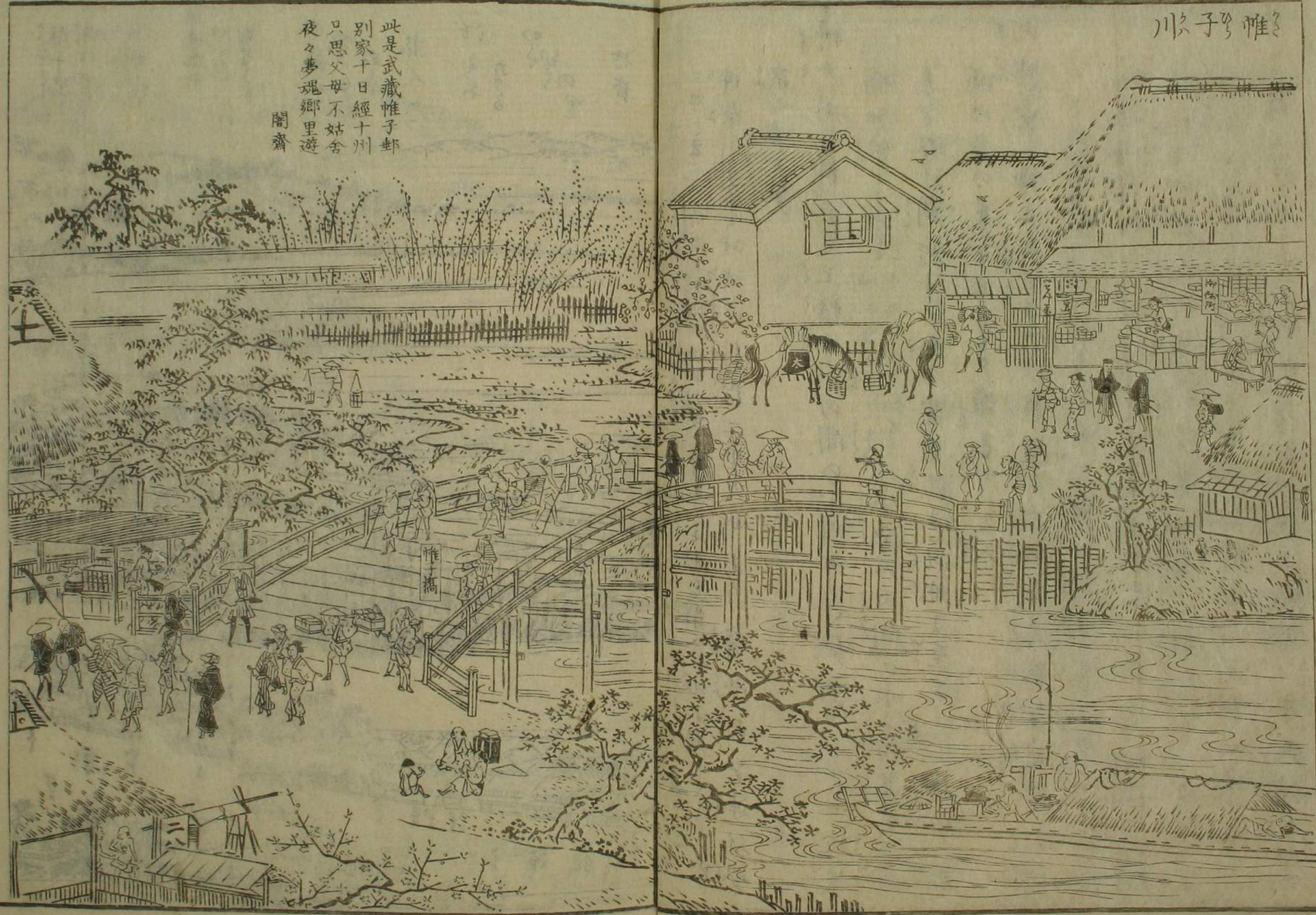
後世川井二股川程ヶ谷宮林同所八坂等の地へ迂

まゆりせりし神託あるを以終る嘉祿二年九月十六日

川子唯

此是武藏惟子郵
別家十日經十州
只思父母不姑舍
夜々夢魂鄉里遊

閻齊



境木
 土人の称なり
 武蔵相模の
 境あり故に
 傍尔の
 杭を建
 らしめ
 らるなり
 此名あり





科濃坂
権太坂
とも云

此山上より迂り又元和二年三月三日今のゆく平地へ

宮居と造立を云 見目河神田春日町天神町の地より

古町街道 芝生の追分より下帷子の右の裏通りを程ヶ谷の

元町へ出る通路ゆく行程十八町あり則古の街道

なり万治二年 或ハ慶長或ハ今のゆく通路を改られより裏

通より古町街道と稱し今の驛舎を新町と名なり

惟子橋造香の路ハ此古町 街道と往還の通路と也

界木 立場ゆき道より右ハ武蔵相模の國界の傍尔坂

建より此称あり此地牡丹餅を名産とを是を製する店

品野坂 或ハ信濃又 俗ハ権太坂と号す此地ハ武相の國界より

坂路の両傍ゆを蒼松の老樹左右ハ森列とを坂上より

右と望めハ芙蓉の白峯玉をけりゆく左を顧むる

鎌倉の遠山翠黛濃ゆく実ハ此地の風光まこと一奇觀

と称す 春日山日記ハ謙信鎌倉鶴岡社恭乃節

江田稻毛小机小杉権現山品野坂杯云海道筋あり

この岩を討敗とありハ此地ゆを中世小壘あり

時田城跡 新町より金澤通道時田村の内時田橋と

ゆのり東南の方五町計と隔て道より左より土人ハ

城山と号く封域東南ハ一町計南北ハ二町餘あり

小丘なり 郡ハ久良岐 往古吉良左兵衛佐義門此地ハ住す

と云 小田原記ハ永祿十年武田信玄小田原を襲んとす

神大寺 左兵衛佐居街なり 左兵衛佐其項大橋守康忠北見關加賀守滿頼相

人 此處の宅と焼せり多目周防守と云 其項青木と云 我構と云 栗田藤巻

此處の宅と焼せり多目周防守と云 其項青木と云 我構と云 栗田藤巻

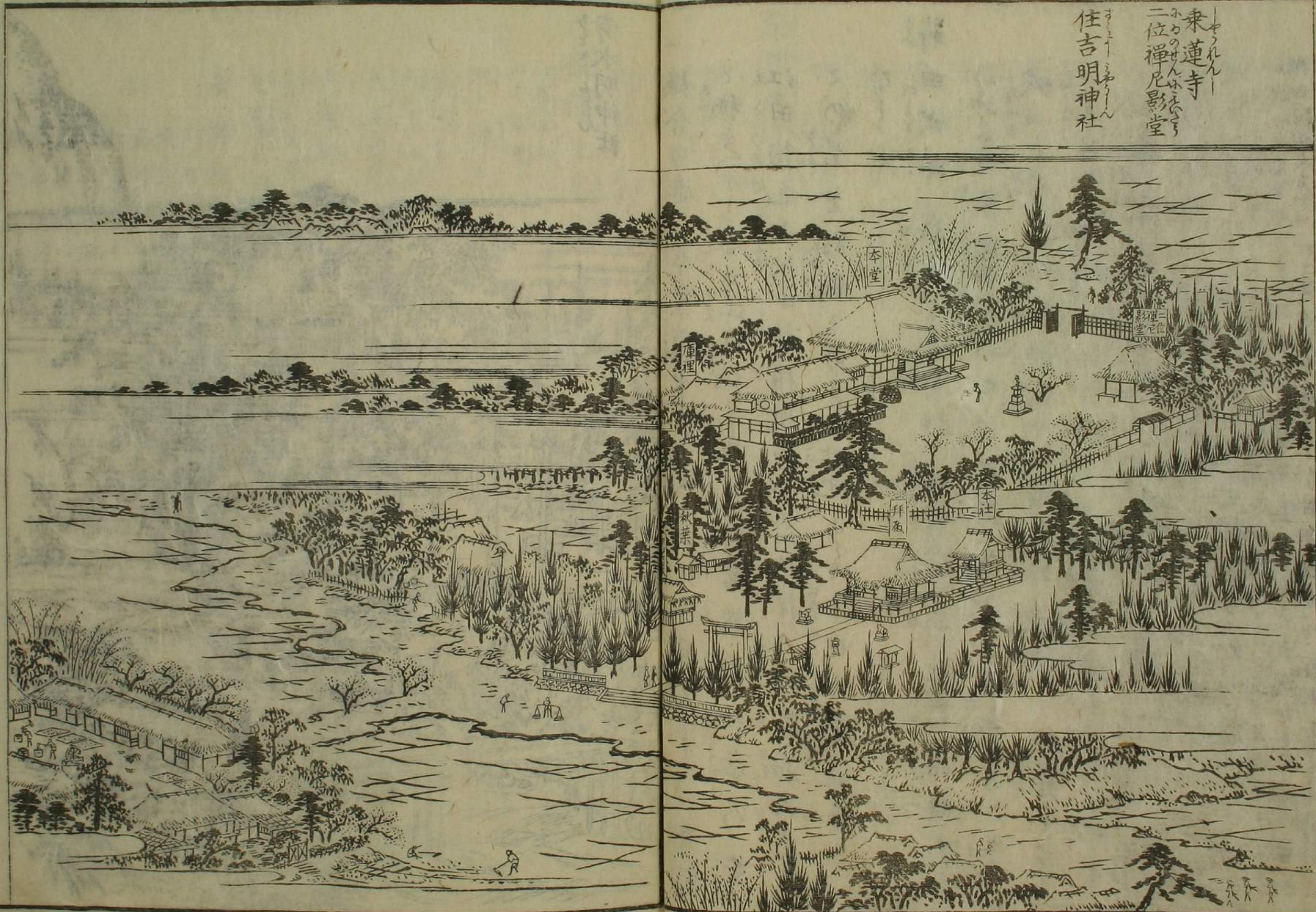
此處の宅と焼せり多目周防守と云 其項青木と云 我構と云 栗田藤巻

此處の宅と焼せり多目周防守と云 其項青木と云 我構と云 栗田藤巻

此處の宅と焼せり多目周防守と云 其項青木と云 我構と云 栗田藤巻

此處の宅と焼せり多目周防守と云 其項青木と云 我構と云 栗田藤巻

兼蓮寺
二位禪尼影堂
住吉明神社



青水明神社



二位 禪尼 影堂

井戸ヶ谷村 乘蓮寺 真言宗の境内 佛殿の側より 相傳ふ此
西光山と号し古義真言宗石川室生寺に属す

地ハ 禪尼 分領の地 々々 尼公の生前 自影堂 在像ハ

等身あり 四十計の 齋 々々 建 乘蓮寺と号せ 其後 度々

兵乱の為 破壊せ 秀 善法印 勸進の功を 慕 寛永

十年 癸酉 影堂と再興 其の 梁牌 福倉志如 實妙觀と

書 平政子の 牌あり 二位 尼 其の 文左

梁 牌 銘曰 二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 將 家 北 方

辨奉 依 造 立 鎌 倉 二 位 尼 御 影 堂 一 宇 國 土 安 全 求 願 成
 乘 蓮 寺 是 也 井 土 谷 爲 卿 依 爲 破 滅 今 秀 善 法 印 廢 堂 号
 將 軍 是 也 井 土 谷 爲 卿 依 爲 破 滅 今 秀 善 法 印 廢 堂 号
 嘉 祿 元 乙 酉 年 七 月 十 三 日 卒 法 名 如 實 世 人 号 尼
 賴 家 實 朝 兩 公 爲 慈 女 賴 朝 公 逝 去 後 經 二 十 六 年
 二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 將 家 北 方

寛永十癸酉年三月十一日

大檀那間宮産次郎忠次
別當 衆蓮寺 秀譽

東鑑脱漏曰嘉祿元年乙酉七月十一日庚午丑刻

二位家亮御六十九歳是前右大将軍之後室二代

将軍母儀也前漢之呂后而令執行天下給若又

神功皇后令再生令擁護我國皇基給露出家男女

併之云云 按當寺梁札の銘も二位禪尼逝去の日を嘉祿元年七月十三日とを

瑞應山弘明寺全澤通達より十四丁涉右の方へ入る弘明

寺村あり坂東順礼札所の第十四番目なり當寺の

弘法大師開創の佛刹ゆへ中興を光慧阿闍梨と号

古義真言宗石川室生寺に属せり毎年七月十日十二月

十八日市立る大賑ハハセ

東鑑曰治承五年正月廿三日於武蔵國長尾寺

源家累代祈願所也云云

佛龕背面銘曰中興光慧阿闍梨注長六尺の立像云

荒木作表本有横削横度十方立像堅救三世長六

尺約六丈十一面頭果地各行基示深旨也

天満宮 本堂の内右の股壇はあを昔浪華の祇客某菅神の像一軀を

携へ来り懸を售むと欲されともつて買人をとせしと云寺主喜躍

しつゝ讚を同旅客笑く云く我有縁の價を求むらんを世室と云

神と非し神院前内大巨通成公の御坊と兼唱善氏其此の鎮守と崇め

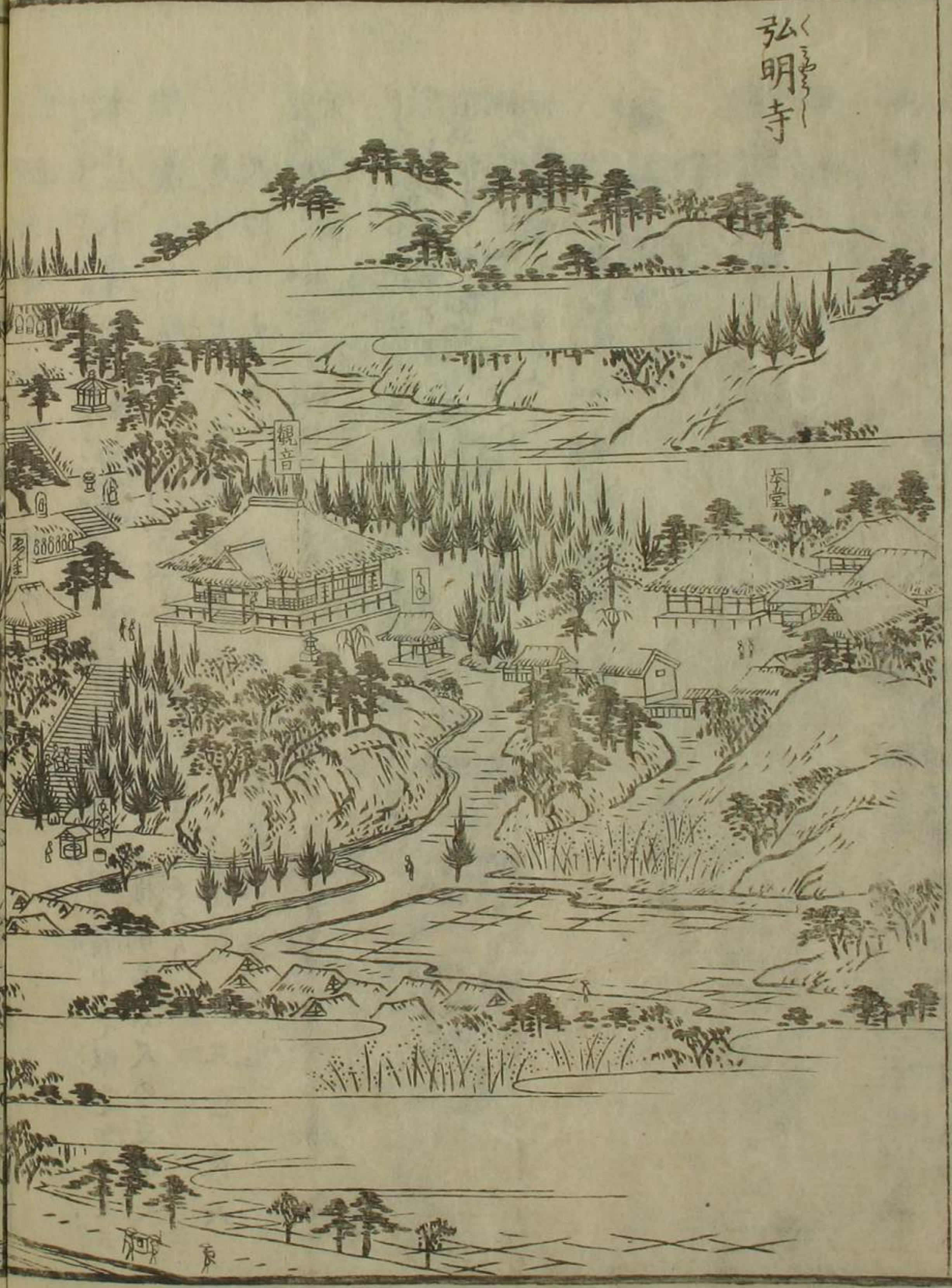
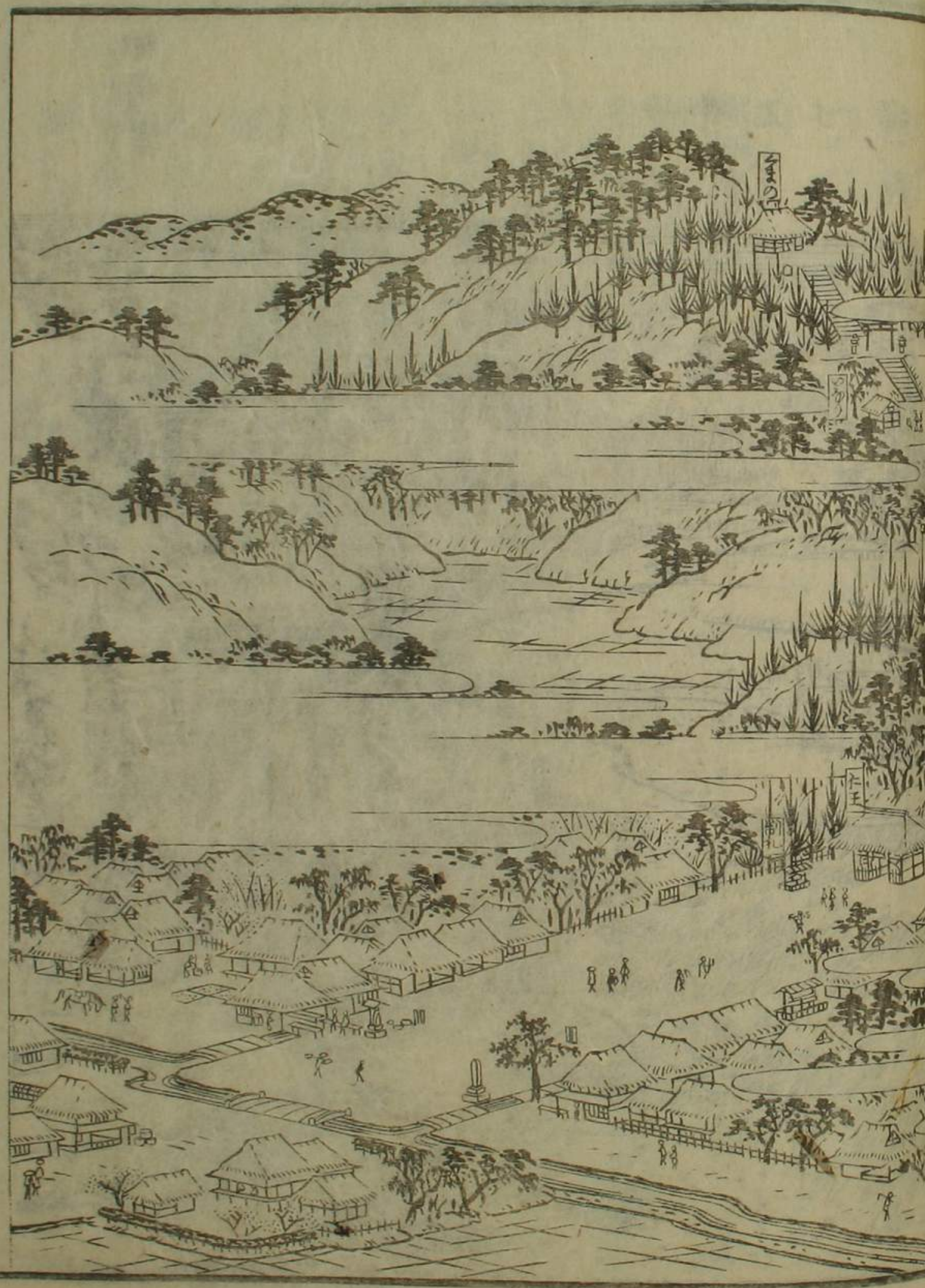
神殿造堂せしと云

額 瑞應山 本堂の向拜と掲る

熊野権現祠 本堂の左の於此山はあを往古行基大士此地に至る

鳥小乗と稱す熊野権現と云く由縁起す

麻耳山 熊野祠の下の洋に俗興の院と号し往古弘法大師勒の地と



神明宮



鯨鐘 堂前右の坂の石の鐘は弘安九年九月廿五日鑄治ののちて願主

七ツ石 神變奇異の靈石や自ら現れ自没する恒に其在所とあり

然 若堂舎破壞及び修理の力をいさる時、因らるる此石現れり

同 郷檀家の庭中よりあり寺僧喜ひ、當年御堂の再堂を金つて了

二王門 石階の下あり金剛密迹の両像ハ運慶の作り、各九尺餘、その

小田原北条家制札 永禄十年丁卯十月二日 佐々木玄竜の書なり

同寺領寄附證文 天文二年癸巳二月十八日 石巻勘解由左衛門守時

本尊縁起曰人皇四十五代 聖武天皇の御宇行基大士東國

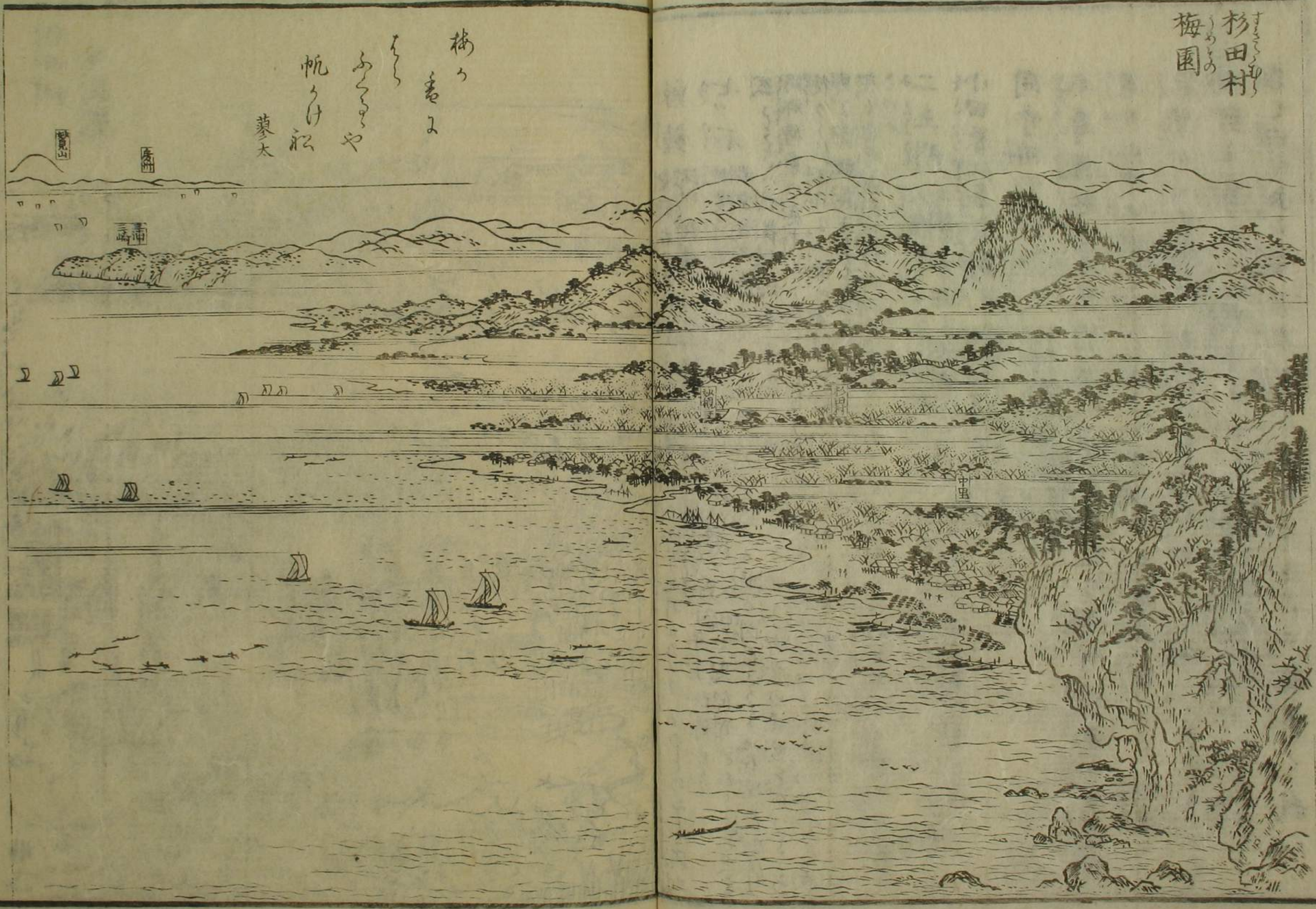
遊化の頃此地に至りてあまの空中小白蓮乱飛りて山上より

散墜を大士怪むく山小登りてあまの果より神人のませり一を

白狐に乗し一ハ靈鳥に乗せ 今境内は鎮座の熊野の各大士より

告て曰く去る養老年間印度の善無畏三藏遠く我

杉田村
梅園



梅

香

々

々

帆

蓼太

江

山

山

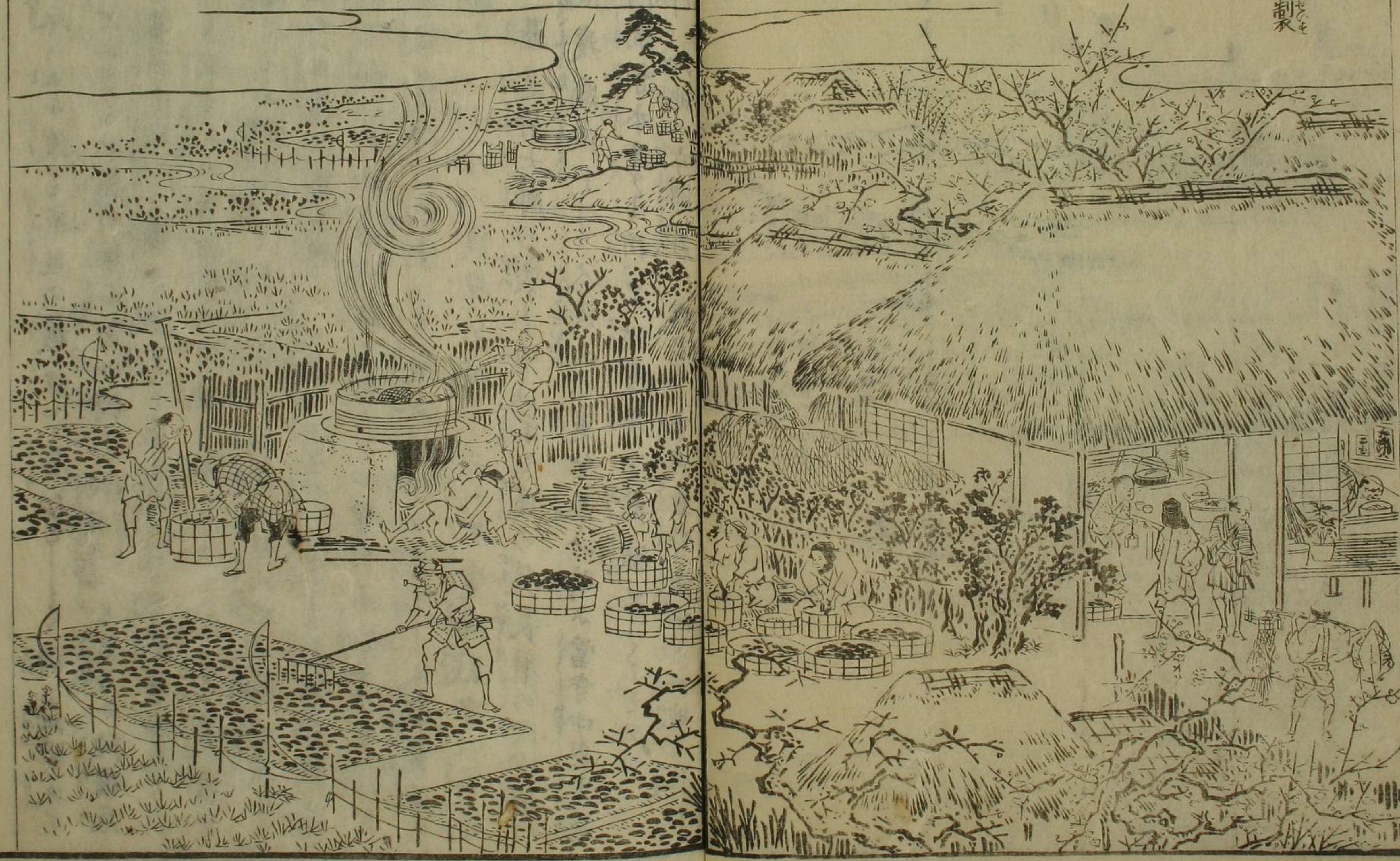
山

山

山

山

杉田村
海鼠製



日本の土小渡を密教の機縁を要むと終ふ此の地に来り
 心を止め七箇の蟠石を加持し所謂七ツ石又其の石小陀羅尼
 と書寫一此山に鎮す結界しぬと云詠て其方をあらひ
 あらふ於大士善無畏の素懐を鑑一十面の像一軀を
 彫り當寺の棟又弘仁年間弘法大師此地に錫を飛し
 無畏三藏の舊と興一行基大士の跡を継ぎ大悲者に淨
 利と翻あみ伽藍安鎮の為を四臂の不動尊我作と
 密教獲神の法樂を般若心徑を書寫し人法繁榮の
 為ふ一千座の護摩と修一且大黑愛深此字の宝塔
 一基是皆大師の製一あの遙の後長曆の頃武相の
 間疫癘流行し人民大小是を患ふ時に當寺中興光慧
 阿闍梨本も小新に此疫災を除滅せしと云く
 此地ハ六浦莊の内なり吉田兼好法師此地に住れ
 金澤

絶妙の勝地なりと稱せしれり往古巨勢金岡此地の勝
 景を摸し畫むと及つて筆を投じ嘆賞を大明
 心越禪師ハ其佳景西湖に似とと其八勝に准疑
 八詠の詩賦あり

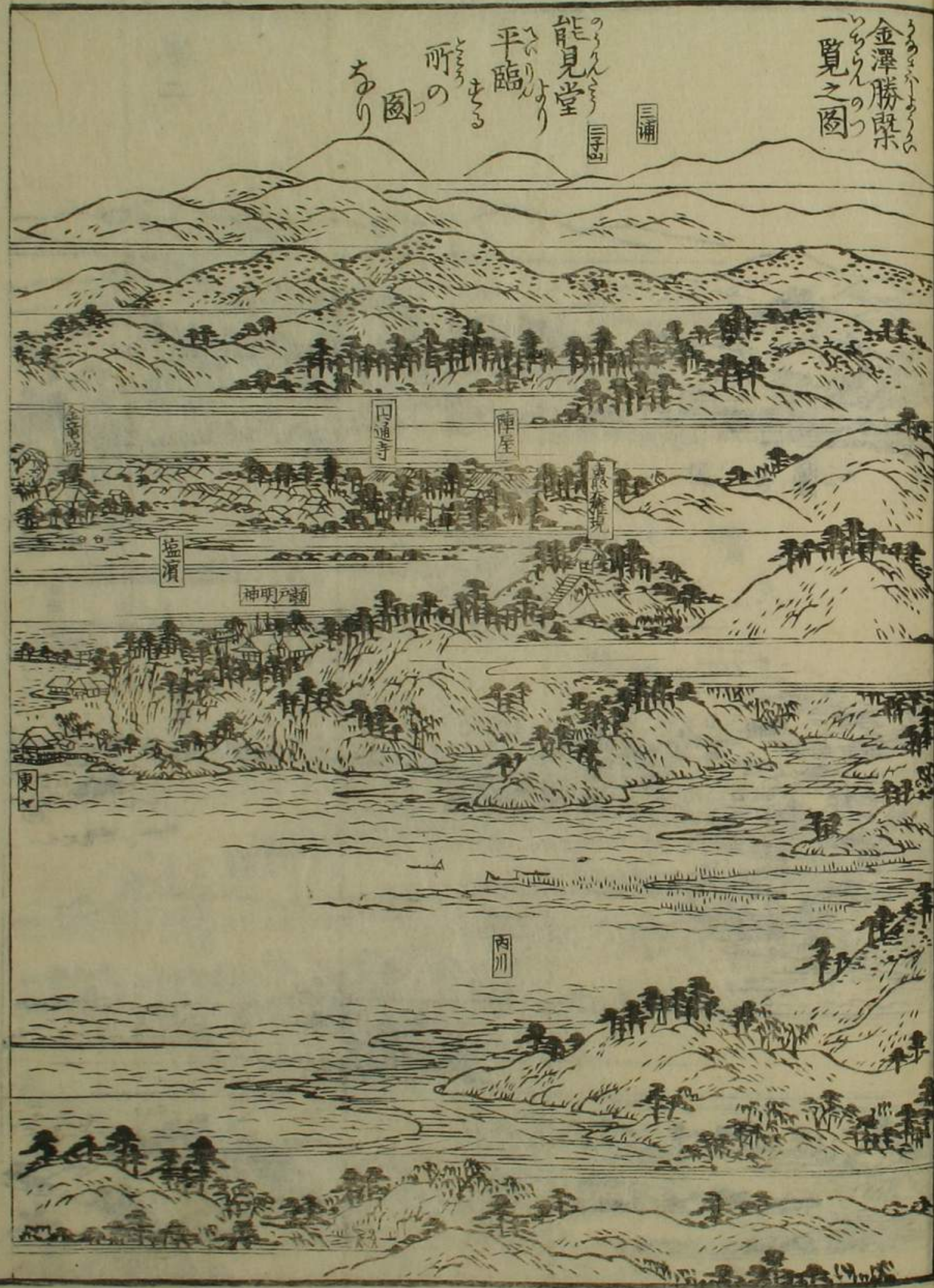
泊々洲崎晴嵐暉滾々狂波遠竹扉市後日斜人
 静悄行雲流水自依依狂波遠竹扉市後日斜人
 清瀨消々不繫舟風傳虚籟心中秋廣寒桂子香
 飄處共看水輪島際浮虚籟心中秋廣寒桂子香
 暮雨淒涼夢亦驚甘泉洞々聽分明蓬窓掩塞無
 相識歸帆山鐵笛聲洞々聽分明蓬窓掩塞無
 朝宗萬帆連天無恙輕帆掛日邊款乃高歌落
 雲外依稀數艇到洲前輕帆掛日邊款乃高歌落
 昔名藍晚鐘數艇到洲前輕帆掛日邊款乃高歌落
 風一片藍迷成鐘數艇到洲前輕帆掛日邊款乃高歌落
 生平悟落雁離祇樹木晚扣若鯨音幽明聞者咸

涼や折やは 是ハ 筆 擲 松
 西山 宗固



能見堂
 擲筆松
 此所あり
 金澤の勝
 際を平臨
 まる園ハ
 挙る





金澤勝景
一覽之圖

能見堂
平臨
所の
あり

能見堂

金澤稱名寺の良の山上より禪宗の草庵あり

本寺の地蔵井ハ惠心僧都の作中一八分有りと云
後世立像二尺五寸計の地蔵菩薩を作し靈像をハ

其胎中よこめり云故よ此草庵を地蔵院と号く
近世久世和州侯源廣之建立あり
能見堂の額を共心越禪師の書なり
巨勢金岡なるもの其真景を写さんと筆及ハ

列陣中冥堪入塞荻蘆蕭瑟幾成隊飛鳴宿食恁
棲進千里傳書誰不愛
廣内川幕雪沒潛奇花六出以鋪練渾然王砌山
河色遍覆危峯露些尖
獨羨漁翁是作家持竿盪漿日西斜網得魚來沾
酒飲披蓑高臥任堪誇
武州金澤擲筆山能見堂有蒲相八景之風味因觀
鎌倉志甚詳一夕寥寥對青燈漫賦八景之陋句以
識斯勝境云歲執徐夏日
東阜越杜多州



其二





以絶倒...のりけん堂と云と梅花無蓋蔵は濃見
堂は作る或人云此地より望めハ瀬戸の八勝まて皆能見

故能見道と云とつ...
澤庵和尚のうらら記り能見堂の松と云立ありく金澤と見下せと
詞及能化堂ハ作られ
擲筆松堂前存存此の大松をの巨勢金岡此地の勝景筆やと
及いりてを以て此樹下筆と投し

梅花無蓋蔵 出金澤七八里許攀最高頂則山々
水々面々之佳致昔畫師金岡絶例擲筆之處有
名無基但其名不甚佳相傳曰濃見堂也中畧又
云畫師擲筆之峯云云 萬里居士

登々匍匐路攀高 景集大成忘却
秀水奇山雲不裏 畫師絶倒擲秋毫
涼... 西山 宗因

此地に至る... 金澤の勝景を望めハ畫ハ如く南より西

北よめくろくハ皆山中東ハ滄溟に連る千里の風光
窮りなく沖舟の真帆片帆ハ雲小入るとあやハ海る
瀬戸の神祠ハ水に臨み稱名の佛閣ハ山小傍より漁家
氏屋ハ樹間くくハ島嶼ハ波間くにあ
る又離戸の烟潮水の盈虚も皆此擲筆松の下に平臨
せし水や一瞬に遷り一日早晩の異なる一年春夏
秋冬の変わる千態万状極りなく閑左の一勝地あり
あつと松島象潟の風致あつと以雅客遊人留連時と
移せしつとも其十と究る能つと

金澤山稱名寺 町屋村にあり 弥勒院と号に真言律に

南都の西大寺に属を當寺ハ龜山帝の勅願所なり

北条越後守平實時の本願其子頭時の建立なり

本尊弥勒菩薩ハ唐佛なり立像五尺五寸あり傍に蓮慶

の作の地藏菩薩の本像二軀を安んず

小田原北条家分限帳に金澤稱名寺領金澤に伏せあり又氏綱の三男

兼壽王所領の内金澤稱名寺領金澤に伏せあり又氏綱の三男

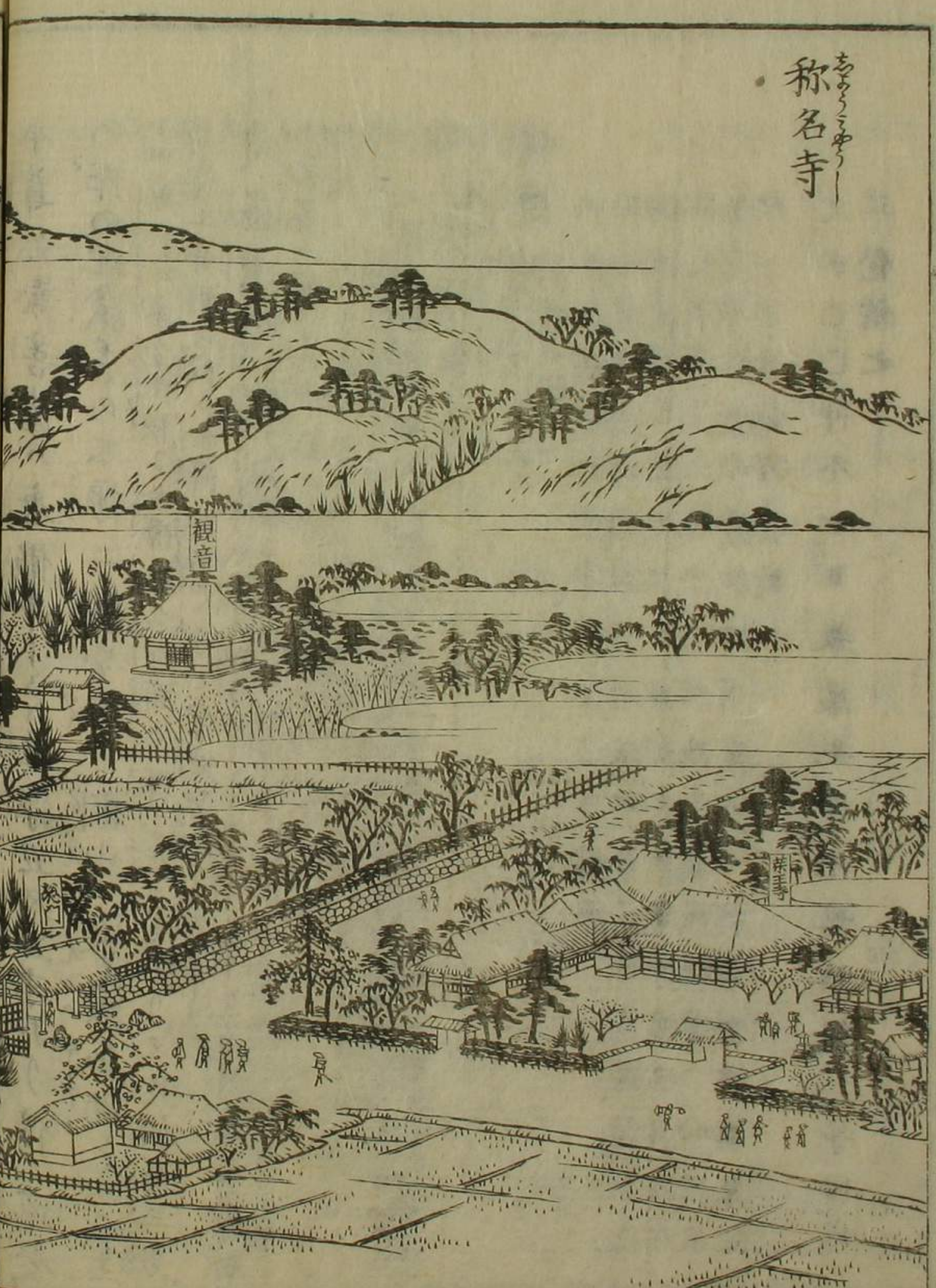
愛海堂本堂の西にあり本堂一切經を藏す

大結界の圓に三重塔と注し道興准后の回國雜記に稱名寺とあり

又澤庵和尚の鎌倉記行中本堂一字あり諸堂皆跡をとり五重比

鐘樓本堂の東にあり其銘小云く

大日本國武州六浦莊稱名寺鐘銘
諸伏魔力怨除結盡無餘露地擊響音盡當雲集
諸欲聞法入度流生死滅已寂滅為樂一切衆生
悉有佛性如是生滅住無有衰易一聽鐘聲當願衆生
斷三界苦頌證菩提
文永己巳仲冬七日奉為先考先妣結緣人等同成
正覺鑄之



あまのうら
称名寺



其二



金澤頭時墓



金澤貞頭墓

大檀那越後守平朝臣實時實泰谷禪尼

宋入宋小比丘 慈圓種述 洪書

改鑄鐘銘并序
 此鐘成乎文永
 力非募士女更
 伏乞先考超三
 於光世音豎乎
 洪鐘之起其始
 質備九乳形象
 三朝之夕趣無
 之朝之夕趣無
 正安辛丑仲秋九日
 大檀那入道正五位下
 法名慧日當寺住持沙門
 大和權守物部國光山
 城權守同依光

同貞頭墓
 金澤頭時墓
 當寺大檀那
 高七尺餘
 阿彌陀佛
 石塔
 高七尺餘
 阿彌陀佛
 石塔



六浦秘法日荷上人
 称名寺の住僧と
 蔵小基と圍之伎
 寺の二王を
 賭物とせ
 上人勝り
 うれは終ふ
 これを負て
 甲州身延
 山へ至られ
 うりーと云
 大力無双の人
 なり

前朝金澤古招提
 梅有西湖指枝拜
 遊十年遅雖啞臍
 未開遺恨翠禽啼
 一横枝上粘西湖
 名字斯花別不呼
 意外春風真假合
 傍人定道各成圖

櫻梅 同所あり花重辨 普賢象 本堂の前左の殿あり一品に
 文珠櫻 同所あり普賢象小對一の 一室 鐘樓の後あり門一の
 今ハ荒廢せり澤庵和尚の鎌倉記に於ての室との書せし額を揚く
 声のたのむとち坐禪觀法の床をあらはし似たりとありく寛永永乃
 頃も荒廢せり

阿弥陀院 本堂より左山の傍あり 二王門 樓門の左右に安置せる
 運慶の作あり此二像ハ松田村東禪寺とのありそ小進せり當寺
 旧の二王を六浦の荒井平次郎光吉出家終小日荷上人勝り當寺の
 称名寺の住僧と基を圍二王と賭とせ終小日荷上人勝り當寺の
 二王の像をぬく身延山に送られりと六浦上行寺に其二王の像の玉眼
 なりと稱せり五寸ありの玉と傳へり

熊野新宮 此の西岡の鎮守あり
 寺寶佛舍利 八祖相兼の舍利と号し代々弘法大師大和
 國室生山に納置りしと 龜山帝の勅に

當寺へ後納すといひ昔ハ 弘法大師の作ありて
勅封ありしと云なり 龜山帝の御念持佛中々 請雨經瑜伽論
愛深明王金銅像 龜山帝の御念持佛中々 請雨經瑜伽論
共ニ菅丞相の真跡の瑜伽論ハ長二寸五分一行ハ二十五字あり此論ハ一部百卷
紀州高野の金剛三昧院ハ一卷江州作生島ハ一卷以上合せハ八卷ハ今尚存
枚舉せしむ違ありん

大界外相圖

元亨三年當寺結界の図なり其光景尤大度高堂小
元亨三年癸亥二月廿四日 今ハ異なり其裏書の按云

當寺本願越後守實時及ひ顯時貞時貞將等の画像の
唱法 多宝寺長老俊海律師

懸幅あり

揚貴妃玉簾一連 初尾州熱田ありしと 龜山帝の勅あり當寺ハ
梅花無盡藏曰 金澤林名律寺間 西湖梅以未開為
遺恨矣珠簾猫 兒支竺群書之目錄無介者而不能
融目云云 主曰林名寺水晶簾唐猫見之孫一大時叡及郡書

蓋先代貯焉 又曰寺秘件々之物容易元使人看之也

田園雜記

巻の長三三尺四寸ひろく四尺半あり水精の
わきまをそのみのわきのまをわきまをわきまを
わきのまをそのみのわきのまをわきのまをわきのまを
わきのまをそのみのわきのまをわきのまをわきのまを
地を懐くといふ

北條陸奥守制札

金澤阿弥陀堂称名寺領敷地并垣場等事
右於當所軍勢并甲乙人等不之致咎妨狼藉若於
令遠取軍者為被處罪科之被注申交名々状依仰
執達如件

康安二年五月廿四日

陸奥守

永享十一年称名寺領結解状

註進

道與 准后

稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢永寛結解状事

合八十貫文内

六十九貫六百文

八貫文

一貫文

八百文

三百文

三百文

已上八十貫文

右所勘定状如件

永享十一年三月三日

政所憲意判

當寺北条家繁昌の昔魏こころ巨藍なりなるうとも物換り
星移り堂宇多く破壊し今ハ山圍と古木替えく松杉

梢とありこ常小鬱くあり房宇をえくくく寂寞の
扉と閉ち座禪觀法の床とありくに似くく

金澤文庫舊址 阿弥陀院の後の畠といふ東野文集子寺前の
土庫文庫の稱茂

冒と相傳北條越後守平顯時宮建をるあわく内に
和漢の羣書と納め儒書を墨印佛書ハ朱印と用也

印文ハ楷字ゆくく豎ハ金澤文庫の四字と注す印章の
摸形を

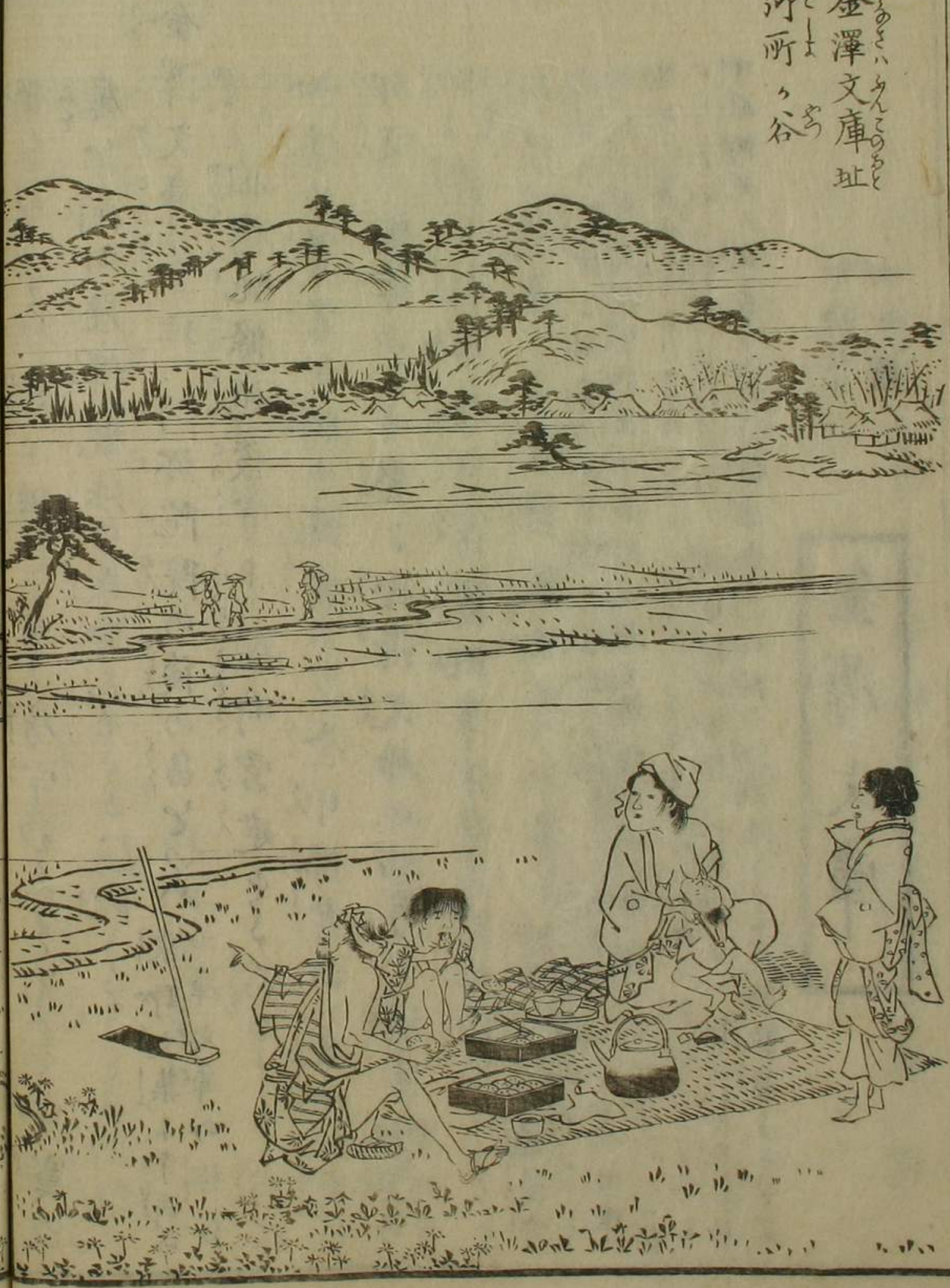
吹よ後上杉安房守憲實執事うり一時再興せくく
其後ハ荒廢し書籍散失せりとなりし丙辰紀行小越後守

清原の教隆ハ群書治要を讀せる余ハ行りし文選清原の師光左傳教隆
群書治要存氏要術律令義解本朝文粹續本朝文粹續日本紀をのとこハ
其外人家ハありも一部となりし東見記云金澤文庫内ハ左傳の卷本三十卷
中原師光ハ跋ありとり鎌倉志ハ一切経の切残りとるの弥勒堂ハありと云

印面大サ
共如圖

金澤文庫

金澤文庫址
御所ヶ谷



鎌倉大草紙云武州金澤の學校ハ北条九代の繁昌此
 昔學問あり一曰跡なき是れを今度彼文庫を再建
 種々書籍を入置又上州ハ上杉々分國ありこれハ
 足利ハ京并鎌倉内名字の地あり他ハ異なり之彼
 足利の學校を建立し種々の文書と異國より求め
 納る此足利の學校ハ上代兼和六年ハ小野篁上野
 の國司より一時建立の所同九年篁陸奥守ありて
 下向の時此所學校を建てる由其跡今残り
 々々を應仁元年長尾景久ハ沙汰とて政所より
 今の所移る建立しる近代の岡山ハ快元とて禪
 僧なり今度安房守公方ハ名字掛の地あれハとて
 學領を寄進一彌書籍を納め學徒を隣懸せられハ
 此項ハ諸國大にても學道絶えりハ此所日本

一所の學校となる是より猶以て上杉安房守憲実を
 諸國の人をほめたるハ一西國北國よりハ學徒悉く
 集ると云々

觀金澤藏書而作
 玉帳修文講武餘
 牙籤映日窺斗
 地上一編看不足
 照心古教君家有

遺人來免舊藏書
 縹帙衆晴走蠹魚
 鄴侯三万欲何如
 收在胸中壓五車

慕景集
 二月將菜金澤の文庫ありて
 日向の勝元の許よりやそれこれハ隣家梅花
 といふ影を供けりて遠くを
 表おれや物とも此を記すも
 列の梅の少風 持資

丙辰記行
 懷古淚痕羈旅情
 人亡書泯幾回歲
 府儒早晚起蒼生
 境致空留金澤名

御所
 龜山帝の行宮の跡なりと
 阿弥陀院の後の切通を
 出る島を云里俗云く
 鎌倉志

此帝勝地佳境へ遊歴のりあり此れとも此地へ御幸のりあり
舊犯み見えすと

魚好法師 閑居旧跡 其地今あきくす

魚好家集 武彦因重のりあり

右郷の御堂のりあり

藥王寺 三療山と号し 称名寺の前道より左側あり古義の

真言宗あり 龍華寺は属を本寺に胎藏界の大日如来

あり座像三尺あり 當寺は蒲御曹司 範頼卿乃

靈牌あり 表小大寧寺道悟裏は天文九年庚子六月

十三日と記し 由鎌倉志よりとあり 今その牌

藥師堂 本堂の前方あり 廊とあり 本寺藥師佛の像 股士十二神あり

拜せむよりなり 當寺旧は藥師寺と号し 室本大寧寺 是より範頼卿

天然寺 法爾山と号し 同所藥王寺より九丁ありを隔

て 瀬戸街道より野島へ砂道の左側あり 浄土宗の

座像あり 一尺五寸計あり 作者あり 開山は然譽

禪方和尚と号し 永祿二年二月 寺室は弘法大師及び惠心僧都

等の畫り 佛像四五幅あり

龍華寺 知足山弥勒院と号し 天然寺より五六町南の方瀬戸

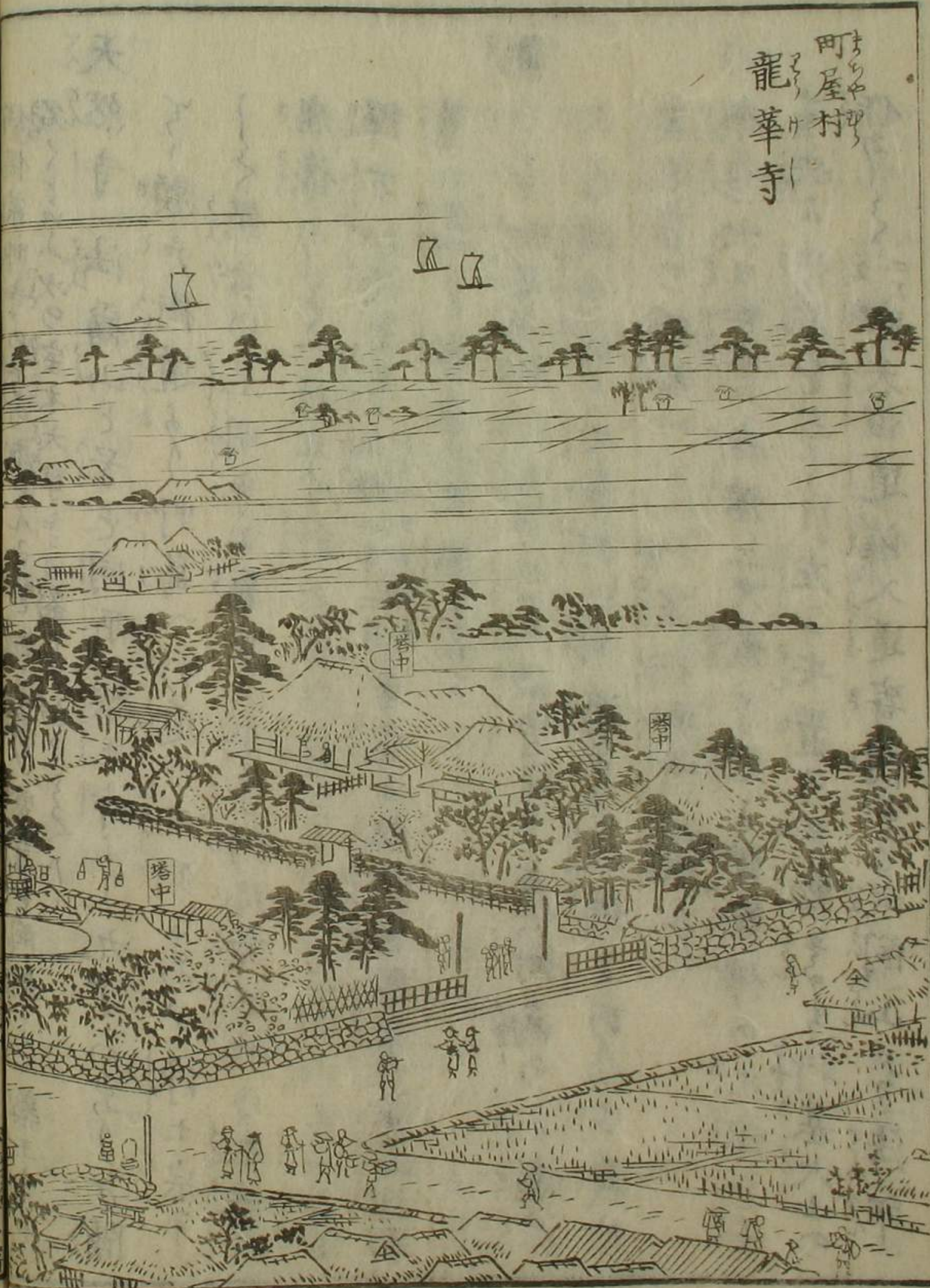
街道洲崎村と町屋村の間道より左側あり 古義の

真言宗の檀林あり 御室仁和寺の末に

本尊大日如来の座像二尺餘り 右は弥勒佛の本像を安

す 共に作者を志し 左は安置の不動尊あり 行基大士の

作あり 立像 太田道灌入道寄附と云 開山は法印



町屋村
龍華寺

融辨と号
鐘樓 其堂前左の方にあり

大日本國武州六浦庄金澤郷 知足山龍華寺
唱鐘知識文 夫滄海者鱗甲所潛泰岳者翔蹄所集則知智池者
念塵所浴靈鐘者亦歟 灰河脫三界苦得見菩提但
留老王之望劍兼亦歟 恆作衆生利

菩薩勝慧者 乃至盡生便死 恆作衆生利
而不趣涅槃 一般善及方便淨 愆等調悉加持
諸法及諸有 一有頂及惡趣 諸伏盡諸有
如蓮體本染 不為垢所染 大安樂富饒
不染利群生 能欲得清淨 諸慾性亦然
三尊得自在 隨求陀羅尼 光明真言
卅七尊聰陀羅尼 隨求陀羅尼 光明真言
各梵字略之

天文十年辛丑五月五日
當寺住法印推大僧都善融
檀那古尾谷中務少輔平重長 道法傳

寺寶兩界曼荼羅 涅槃像 華者詳ありとあり 八祖畫像

像 一幅弘法大師 或願行 十三佛補像 一幅中將姫の不動畫像

一幅弘法大師の筆なりと云傳ふ 天正年間 御當家よ於く重修の裏書よ太田道灌奇進とあり寺僧云く

五指量愛赤明王像 弘法大師の作と云 鈴一箇弘法大師の持物

鳳凰頭 二箇龍頭 上は金の箔と貼せり 灌頂の時幡を掛る具あり

當寺ハ治承年間鎌倉右府頼朝公伊豆國三島明神を

金澤瀬戸の地小勸請ありし後法味を進まざる為

文覚上人と共に志と合せ文治年間六連の山中に精舎を

創建せし彌勒菩薩の像と安し都卒の四十九院よ

準擬し四方よ六八の僧坊を建浄願寺と号庄園若干

と寄らる 當寺退たり往古弘法大師獲摩修りし中 然しより殿堂

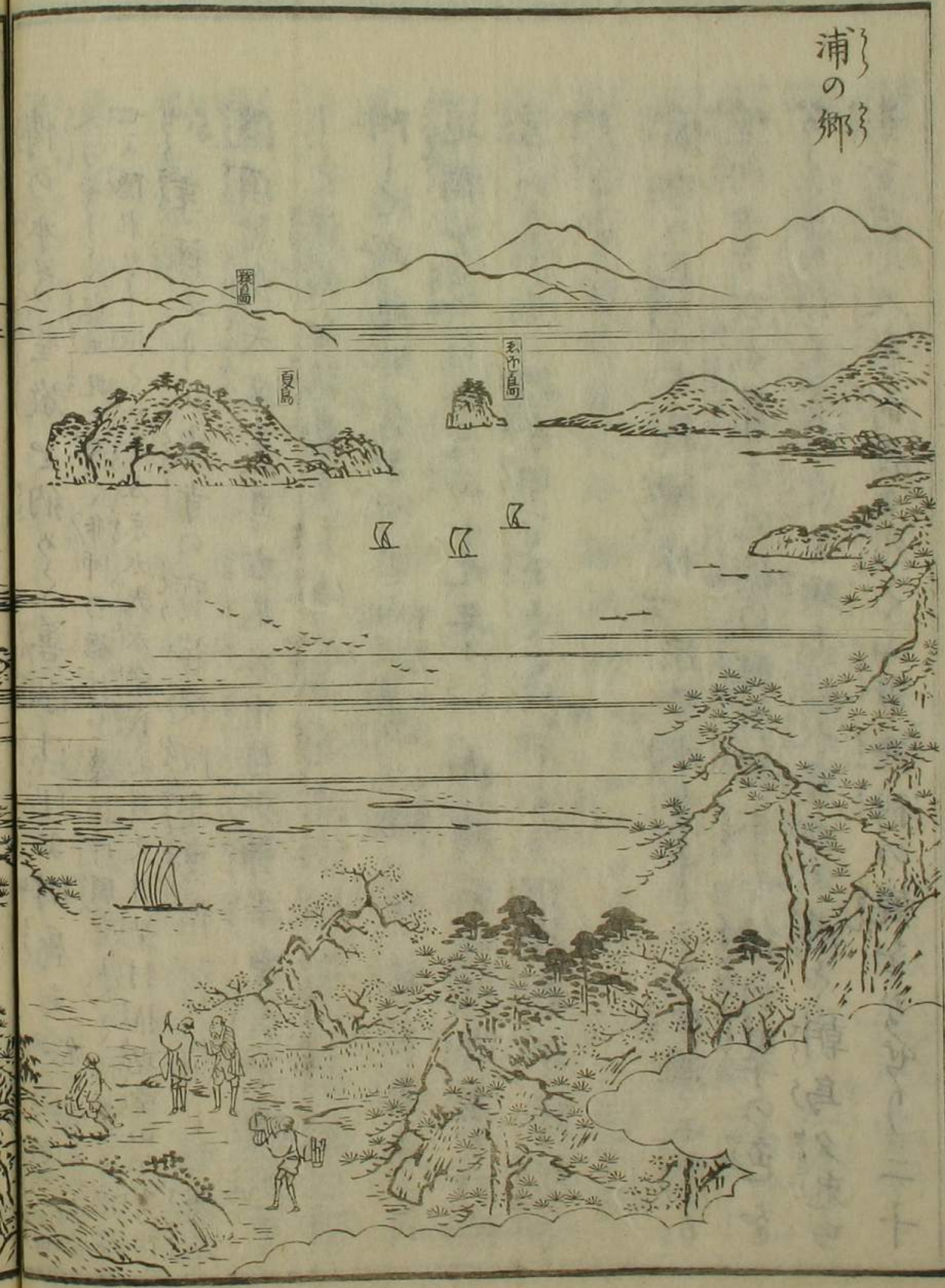
覺を並へ粉壁八月の光を移せ伽藍ハ博敞あり丹柱あり

星の林となせり 其後正嘉年間南都の恩性律師當山小

住し戒律を弘め弘長二年中を東寺の能禪法印當寺に
於く灌頂を修めせしむる印融僧都の附屬に依て光徳寺を
兼帯せしむる此寺も頼朝公の建立の初此寺に住親筆の書籍文庫あり高野山
充滿然る教度の兵乱より無量光院印融東遊の初此寺に住親筆の書籍文庫あり西院の領地も他を奪はれ大に
荒廢せしと明應八年融辨師大永四年甲申八月深く是を愁へ
本尊の眞助を頼りし菅原朝臣中務丞資方力を合せ
伽藍再興を企むとす時本尊彌勒大士夢中辨師に告
めり是より良き當り末世有縁の勝區あり彼所より移
し三密の法燈を挑へしと夢覺る後其を窺はるる小竜
燈の奇瑞あり洲崎村の境なりむつハ堂縮み教團の竟は辨師
本尊の靈尔は任せ此地に至る二町四方は結界し兼帯
せしむるの淨願寺光徳寺西院の僧坊を合せ一寺と爲し
後土御門院の勅を奉り知足山龍華寺と号師資相

傳の本尊聖教を納め善融法印は附屬を此師は相州小田
末子未子龍玉丸と号し舟師の徳を慕ひ淨願寺に僧とあり其營
世は隠れかゝり依り北条左京大夫永樂錢に貫文并柴村權現堂に寄附
享祿五年小東寺の寶菩提院亮惠僧云を請りて傳法
灌頂を受天文十二年古尾谷中務少輔平重長を檀越せ
しむる洪鐘を改鑄せし後太田道灌不動尊の靈像を寄
附し武運延長を祈り此不動尊の像ハ靈牌を置來世の
追福を求るる天正十九年御開國の後當寺を御修
營りし御朱印を下し御朱印四海泰平此祈念
意意
當寺ハ眞言古義檀林一宗の本寺中々金澤小甲より
境内に古木聳え覺樹の粧ひを示し緑竹翠の色を
なす實相不變の容を頭を海水左右に湛く朝鳥夕兔の
影を浮へ人家前後に列り山市漁村の觀をなせり二十

浦の郷



鎌倉記行

夕下

鳥帽子

仲より

あき

降菴和尚



有餘の未寺ハ林邑ニ散在シテ年々の法會月々の勒修
恒例ニ任セテ怠る者ナク寶祚の長久武運の萬歳茂
祈ミテ暮る曉の振鈴の声ハ無明煩惱の眠を覺シ夕比
梵鐘の響きテ三途の迷夢を破る實ニ江南の一精舎也
善應寺野島山ト号シ同所ヨリ半道シテ鹽濱を隔テ南の
方野島ニ傍テあり真言古義ノ龍華寺ニ屬シ本尊
不動明王の像ヲ作者ト云フ正觀音の本像ハ立像ニ尺半
ありテ聖徳太子の作ナリ愛深明王ハ座像一尺五寸ナリ
ナリ弘法大師の作ト云フ此像の胎中ニ愛深王の像
野島同所東の出崎ヨリ瀨戸橋ハ至間七八町あり土人
百軒島トモ云民家百軒ヨリ餘る時ハ必災あり餘ノ百軒島ト
呼ビテ此所の出崎ニ紀州亞相頼宣卿の山の出崎ニ稻荷の
小祠あり又中腹ヲ菅神の宮あり此地の北ニ北を平方ト
いハ町屋村の東ニ金澤原ト云フ此地の東北海濱ト云
靴の浦ト稱セテ

鎌倉記行

岩のありしふもひくく自ら體をゆ
汀とてしなれは色は地ありてなれハ

乃の林と云ハありせしありしあり地をぬのまを移乃之 澤庵

野島渡一野島ヨリ南の方室木村ハ入渡一ヨリ舟路
一町餘ニあり江戸ヨリ浦賀への近道ナリ

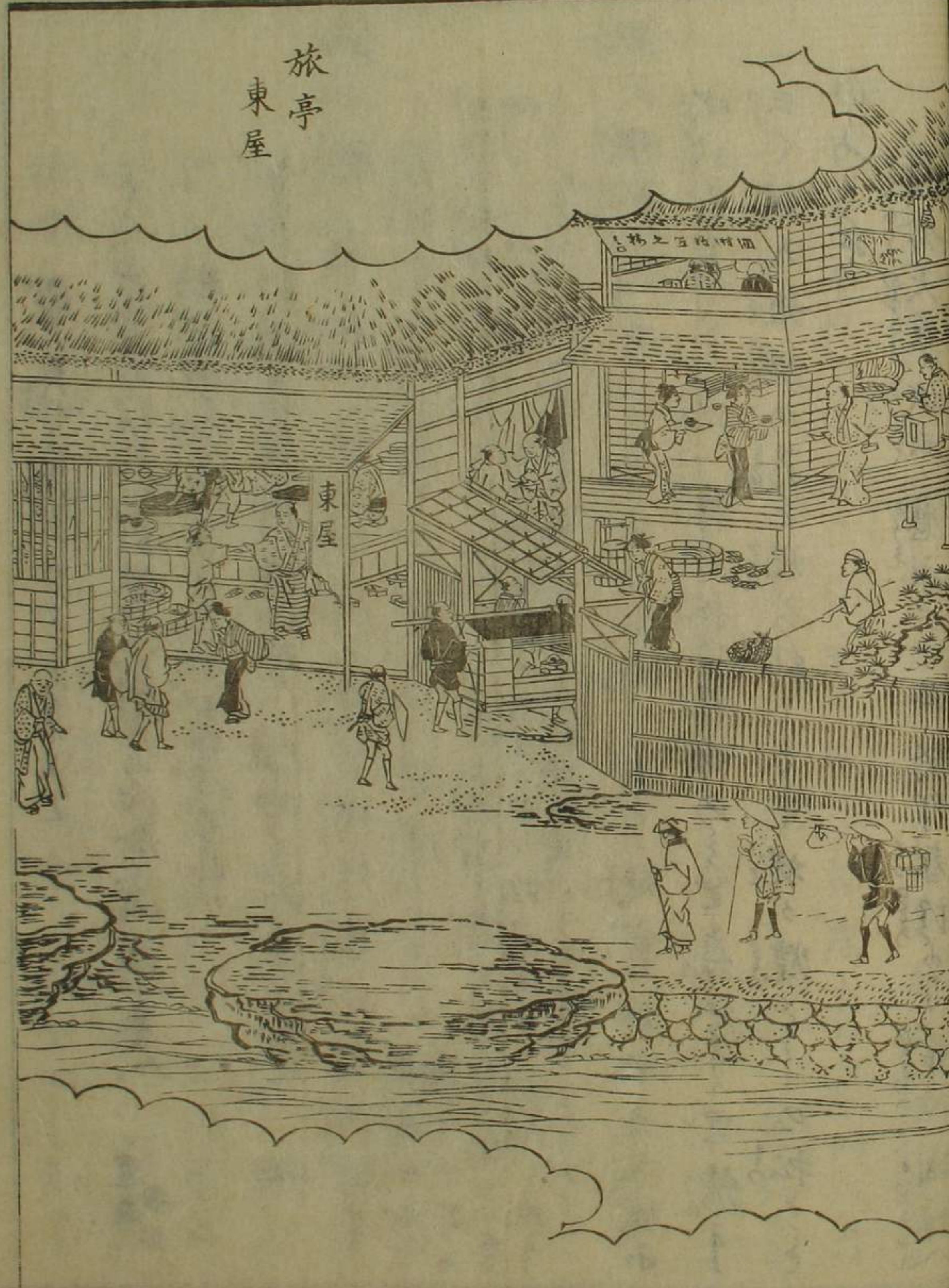
洲崎野島の西瀨戸橋の東北漁村を云鎌倉志ニ云太平
記及ヒ鎌倉年中行事等の書ニ洲崎ト云ルを鎌倉山
内の西ニある洲崎村のヨリ云々此地ありて云々

瀨戸 或ハ迫門 洲崎ト引越村との間とのみ

四國雜記 瀨戸を海と云フ猶地のまをを記あり



旅亭
東屋



其二



瀬戸の沖は海ありてくまを

かゝるにたゞしう波ありて瀬戸の浪は海ありて

道真
推后

磯山は磯ありて磯ありて磯ありて

瀬戸橋 同入江に架を中間に臺を儲け橋杭を用ひし

瀬戸の明神とて入海にさし出たる山あり 古本馬と麓に橋あり橋の下あり

吹折の松とて一株の松の根株のを存せり里彦より

照天姫松 同所北の方西の出崎にあり延寶庚申の大風小

吹折の松とて一株の松の根株のを存せり里彦より

の松とて

鎌倉大草紙云 應永三十年癸卯春より常陸國佐

小栗孫五郎平満重と云者ありて謀反を起し鎌倉小

背とてこれ源持氏結城の城へ勅座ありて同八月

二日より小栗を攻らる終小栗忍ひて三州へ落ゆる

とある條下云今度小栗忍ひて三州へ落ゆる其子

小次郎とて小忍ひて關東にありて相州権現堂

と云ふに移るを其邊の強盗を集りて處に宿城

かりこれハ主の中ハ此浪人を常州有徳仁の福者の由

聞く定て隨身の寶ありて打殺し取らる由

終合を去健なる家人ありて何せん云一人は

盗賊中を酒に毒を入吞せ殺せし先と同一宿の

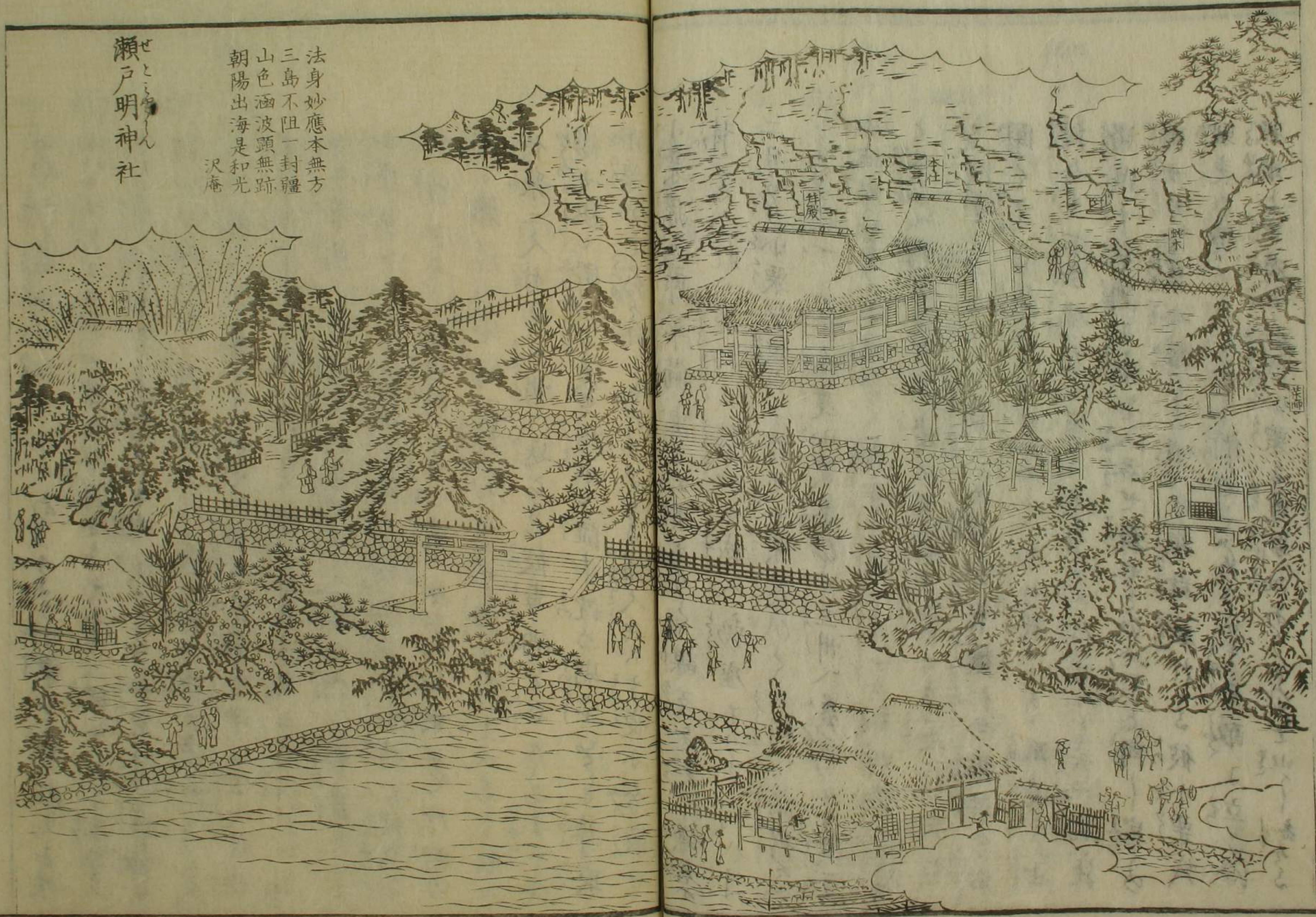
遊女をを集今様を唄ひせ踊舞戯れたる彼小栗城

馳走の躰に酒を呑めり酒を呑めり夜酌に立り侍

照姫と云遊女此間小栗に逢馴此ありてを以て知る

瀬戸明神社

法身妙應本無方
三島不阻一封疆
山色涵波頭無跡
朝陽出海是和光
沃庵



わや自ら此酒を呑まし〜あり〜小栗とあられ〜あれ
由を私言〜間小栗も呑様ふ〜酒を更〜呑〜
〜家人を〜何〜酔伏〜小栗ハ夜初〜
醉〜林の有〜間〜林の内小鹿毛〜
馬を繋〜置〜此馬ハ盗人共海道中〜大名往
来の馬を盗〜来〜才一のあ〜馬〜人をも馬
をも喰踏〜盗人共不叶〜林の内ハ繋置〜
小栗是〜密〜立帰〜財宝少〜取持〜彼馬ハ
乗鞭〜後〜小栗ハ血双の馬乗〜片時の
間ハ藤澤の道場〜弛〜上人と頼〜上人あ〜
侍衆二人付〜三州〜送ら〜彼毒酒を呑〜家人并
遊女少〜解伏〜川水〜流〜沈め財宝〜尋取
小栗〜盗人共ハ夜分〜散〜

三州みづのくに代々居住よつとなり
鎌倉かまくら大草紙おほくさじあり〜考かんが〜照天姫てんてんひめハ照姫てんてんの〜と云い〜小栗の名なと世よ〜
〜氏うぢと稱なづ〜同書どうしょハ次郎じらうとの〜あり〜氏うぢと云い〜を〜
〜小栗こくり系けい譜ふと教しゆ〜小栗こくり五郎ごらう平満へいまん重しげ子こ助すけ重しげとあり〜と云い〜
〜今世いまよ云い〜ある〜ハ〜附つ倉くらの説せつを備そな〜

瀬戸明神社せとあけみよ瀬戸橋せとばしより一町いちまち沖おき西にしの方道かたみちより右側みぎがはにあり
祭神まつりかみ大山祇命おほやまづみのみこと一座いざ〜神主かみ千葉氏ちのべうぢ奉祀ほうし也なり社傳しゃでん〜云い〜
當社あたゝかハ右大将みぎだいしやう頼朝よりとも公治こうぢ兼四年かねしよんねん四月しがつ八日やちふにち豆州まめしゅう三島さんじまの御神みかみ也なり
勸請くわんきやう〜あり〜鎌倉かまくら年中なかつしゆ事務じむあり〜四月しがつ八日やちふにち瀬戸
三島さんじま大明神だいめいじん臨時りんじの祭礼まつりらいとあり〜或云あるいひ往古むかし此神こゝのじん此地こゝへ飛

来りてあふふとも
土人傳へ云今金龍院の庭中飛石と
按て頼朝卿後倉へ入りて治業四年十月六日あり
東鑑小の
此年四月八豆州の配所此條の館はあり社司の
六浦不審以て四月八豆州の配所此條の館はあり社司の
神主拘とあり六浦社領の
遊要阿弥の作と云今本社幣殿の内左右置あり

看督長像
遊要阿弥の作と云今本社幣殿の内左右置あり

額
内陣小
山精神宮
世尊寺後二位經尹卿筆

同額裏書曰
延慶四年辛亥四月廿六日戊辰書之
沙弥寂尹

鳥居額
瀬戸明神
神道長正二位卜部季兼卿筆

鐘樓
社前右の方よりあり

瀬戸三島社鐘銘
洪鐘新製寄器海場
銘體黃玄緇素益大
此世俗頌歌夜禪
覺頃感夢驚生死
眠昏曉
青響

劫々永傳
應安七年四月十五日奉鑄之

檀那
沙弥釋阿并十方四衆等
勸進
大工
大和權守國盛

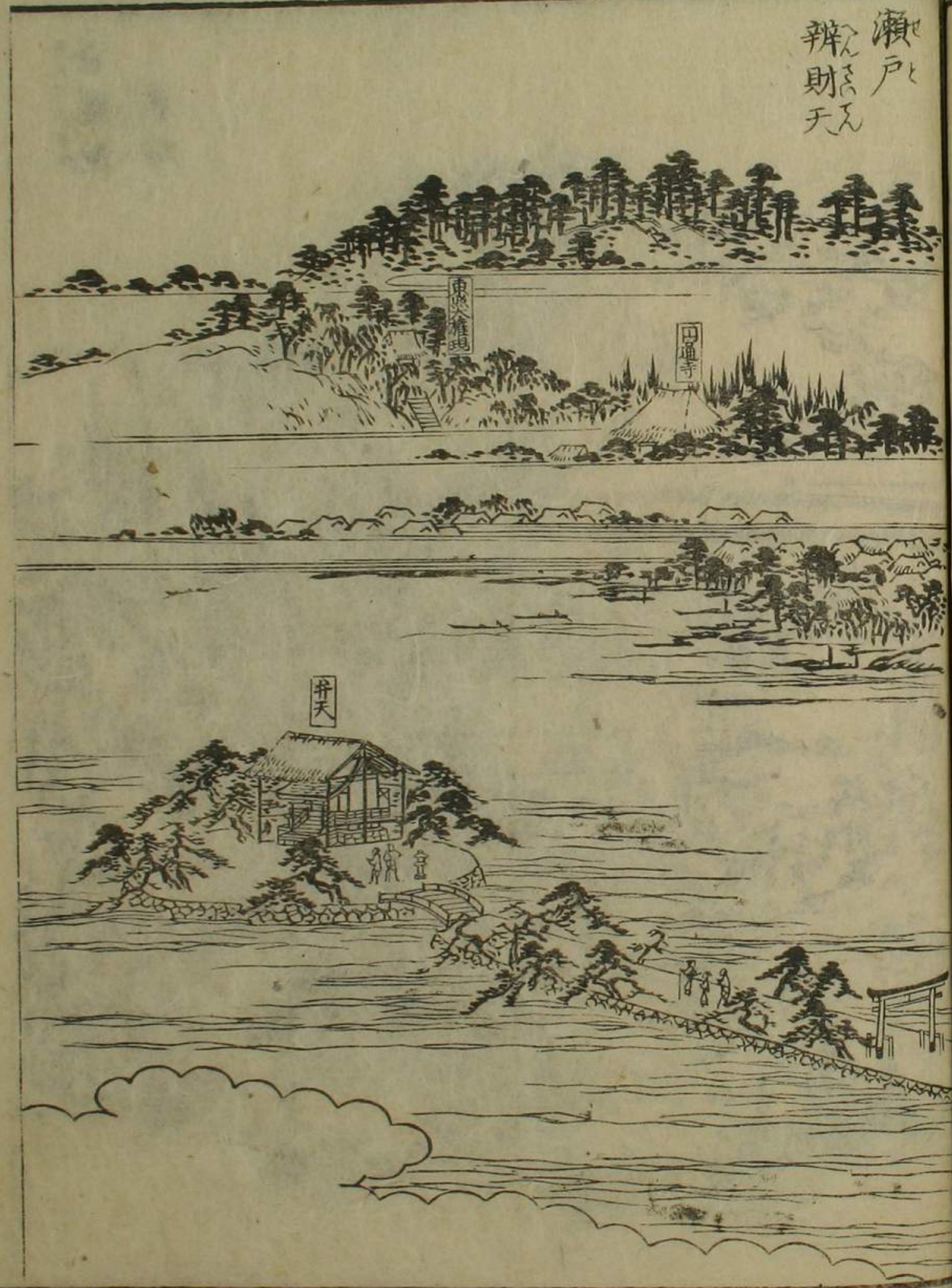
藥師堂

本社の右より土人
按て下僧伊香保の湯は
父左衛門上州伊香保の湯は
者と論一信後と討れり
此瀬戸の三島明神の社前
より放下僧と号する謠曲ありと云
他の書は見えぬ

三本杉
延慶庚申の大風は根株相連りて三本あり生せしも

蛇混拍
本社右の傍あり
延室八年庚申八月六日の暴風吹倒され
蛇混拍は本社右の傍あり
延室八年庚申八月六日の暴風吹倒され

梅花無盡蔵
文
同
頼書
戸社
自注云六浦廟前有古拍屈蟠



瀬戸
辨財天

瀬戸せと辨財べんざい天てん 同どう社前しやぜん道みちと隔へ々々南みなみの入海いりうみへ築出つきだししる

小島こしまより西にしへ昔頼朝むかしより卿きやうの御ご基もと所ところ平ひらの政まさ子こ御前ごぜん江州えしう
 竹生島たけのぶしまの御神ごかみを勸すす清きよせしまれりとあり

此山このやまを遷うつるる一ひと根ね清浄きよじやうなるる時とき六根ろくにん共ともに
 打寄うちよるる浪なみを洗あらはすしし根ね清浄きよじやうなるる時とき六根ろくにん共ともに
 清きよくく我人われびとの頭あたまに神かみもありとありとありとありとあり

當社とうしや境内けいんに千歳せんざいの古木ふるき雲くもを凌しのぎぎ回岩わいわん社頭しやとうを海うみへみ
 まうまるる山やまの勢いきほひ実じつ一ひと巨靈神こらいじんの息いきを延のびびるる河かくくありり

海菴うみやう

遺廟いひやう拍圍ぱくゐ六浦ろくらふ橋はし 朗吟らうぎん繫馬けいば石支腰いししよ
 歸鴨きいは飛破ひは翠屏面すいびんめん 刺被さしひ風聲ふうせい添そ晚潮ばんしう
 鎌倉かまくら記行きぎやう
 追おつつのの御ご神かみ伊い豆まめとと清きよ一ひと根ねありり



きりかん
金龍院
とひや
飛石

終ると云はれしものごとく時世事實とも精しくわす

猶考へし按は海老名源三季貞

荒井妙法日荷上人加持水 同所農家金子氏の地は存せり

井と云その味甘美あり尤靈泉なり此所の小地名を

荒井と稱せしを往古日荷上人荒井平次郎光吉と号

し此地は居住せしよりかく呼ばるるとなり

能仁寺能仁寺の 鎌倉志古記曰上杉房州太守築武州金澤能仁寺

創七宇伽藍請方崖和尚為開山第一世諸山日福
壽彌寺日能仁太守有旨隆能仁寺位列諸山者也
永徳三年小春日東暉曇四月廿一日終住持東暉
曇年三月七日始之同曇那喜上總州法眼朝榮作
之曇大檀那房州道合徳珠書之

能仁寺佛殿梁牌銘鎌倉建長寺の龍峯庵

恭願皇圖鞏固而四海昇平黎庶安寧而五穀豐稔
檀那前房州太守菩薩戒弟子道合敬白左伏冀佛
永徳二年歴永劫而綿延開山方崖元圭謹題右

六浦山上行寺泥牛庵より六七町西南の方道より右側に

あり當寺往古ハ真言の古刹中々六浦山金全寺と号

然る小應安年中此住持某日蓮の法をそと日蓮宗とあり

北徳中山の日祐上人開祖と自ら妙法日荷上人と号

祖師堂 宗祖日蓮大士の像を安んず法華經讀誦のそとあり

祖師木像胎中收藏法華經書寫人名簿紙ハ常用のゆへあり

三寸三分の徑筒へ巻紙へ細字を書くるものあり表紙もなく巻くものあり法華經包紫銅の徑筒へ巻紙へ胎中を収む徑筒ハ唯和鞍間の製のものあり法華經



六浦
上行寺

八卷小書写の人名簿一卷共九卷あり其文よ云く

御身の御経奉書写之人

安立坊の岡山

一	二	三	四	五	六	七	八
卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷	卷
良圓融律師	正圓範坊	祐奠坊	良範坊	衆寧阿	理賢阿	衆寧阿	理賢阿
日源	日秀	日正	日秀	日秀	日秀	日秀	日秀

奉造立 右願主 妙法親父

奉讀誦妙法蓮華經五部

一正上良 府圓總公 同心久讚

奉各方便 十賢品 宛壽量 讀如是 之自陀羅尼品

奉讀誦 十如是 自我謁 題目百廿五

奉唱題目一萬反 日源敬白 御身ノ形相中老日法上人御作也

應永十三年丙戌十月十三日

右六萬恒沙上首上行菩薩此御利益若尔住迹用本
名四字初隨有喜形相身任御附屬妙法之要五字弘一
天四海秘法良藥施萬人所嚴迷者也 廣爰流布因探純就信
心大施主等之成就所嚴迷者也

釋迦堂 本尊釋迦多寶四菩薩 真言宗

六浦妙法日荷上人石塔 祖師堂と釋迦堂との間櫃の本にあり

上下とも後人造り添へたるものか海の中腹の石の横面を文和二年六月
十三日と彫りあり流井平次郎光吉と引建長六年甲寅日蓮大士北總中山に
相法俗稱を流井平次郎光吉と引建長六年甲寅日蓮大士北總中山に
此法上人未荒井平次郎光吉と引建長六年甲寅日蓮大士北總中山に
上人の隨從し此法上人未荒井平次郎光吉と引建長六年甲寅日蓮大士北總中山に



侍花川
光傳寺



かろしと生捕く六面の沖に沈みそりけりしとありて火く異あり
永祿の頃ハ小田原北条此地を領し六浦本曾分の地ハ
武田家へ付し同所大道分の地を龍源軒とす付し
たし由分限帳よんそりし

澤庵和尚鎌倉記行

あられハ三日鎌倉へ移りて坂を登りて
野ありてあむむはの海とてこへま
こころ海をのみとれあそびをん

海士のもろ此ありとせん

六浦川 此地の道を横きりて流る小溝を云又此溝は架す

小橋と六浦橋と号くといふ

日光山専光寺 嶺松寺より二町計を隔てて南の方道よる

右側よあり浄土宗中々同所天然寺は属本尊十一

面観音ハ立像一尺計あり佛工春日の作なりと云相傳ふ

照天姫の念持佛中々姫松葉中々燻らしし一時身代

故小山号とを

油堤 同一寺の後の田圃を隔てて津町を西の方小續き

山を油堤と云由土人云は鎌倉志中を傳光寺の里諺に

照天姫の乳母侍後とすもの姫の粧具を携へ此不逆

具と捨る終は此所の川へ身を沈めし故に号とす

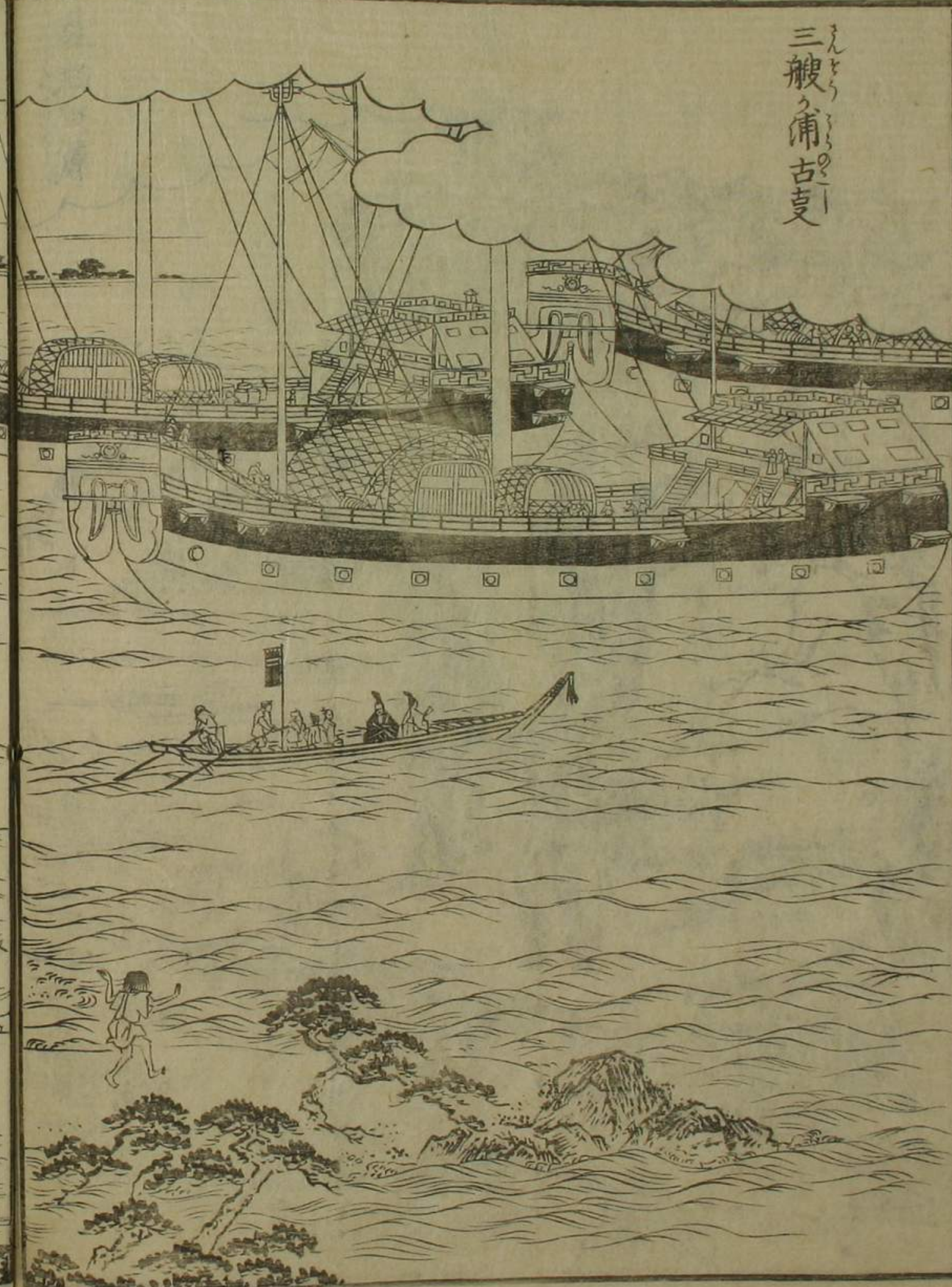
侍後川 川村と大間村との中間光傳寺の前を流る川の

下流をいふ水源を鎌倉より發し、未ハ三艘村より鹽濱へ
 出く海灣を會し瀬戸街道へ横らりて架を橋を侍從
 橋と号名義ハ油堤の条下よ云々此橋を渡りて右の
 道ハ武藏相模の國境地藏の辻へ出く鎌倉へ往還の道
 なる南の道ハ三浦三崎への通路なり左の川傍の道ハ
 三艘浦又相州境浦郷等への道なり

常見山光傳寺 同所北の端道より右側侍從川に傍る
 あは浄土宗あり鎌倉光明寺に属す阿彌陀
 め來の本像を立像中々四尺許あり作者あり
 岡山ハ得蓮社忍荅靈傳上人と号門の内右の方より
 地藏堂あり本多地藏菩薩ハ立像六尺許あり
 運慶の作ありと云地福山藏光寺と号
 界地藏 土俗鼻缺地藏と称し光傳寺より九丁あり

鼻缺地藏





三艘^{さんぶね}浦古^{うらこ}夏^{なつ}

西の方鎌倉道の傍にあり巨巖の壁立しつる所は
此の像を鑄せしむる像の鼻缺損也此所ハ武蔵相摸の
國界や嶮村と号す

三艘浦 六浦の南向三艘村あり永祿九年の春唐船

三艘此浦に着岸せし故に名付くを鎌倉志云其時

舟に載来し一切経及び青磁の香爐花瓶等も皆

称名寺に傳へありと云

海蔵山太寧寺 三艘浦の東瀬崎村あり

布金の道場や薬師寺と号し真言宗なり

御曹司源範頼公生害あり後其法号を採り太寧寺

と号し千光國師開山とあり

寺の属寺とせ薬師寺の号の廢せんを歎き寺前村の地へ

本寺薬師如来立像丈五尺あり十二神將の像ハ三尺中

あり共運慶の作鎌倉志に當寺勸進帳を引く

云往古 伏見帝永仁年間此村に貧女あり父母の忌

日は當りし佛に供養しき便かり絲を像

卷子とせ賣り佛餉に備へんと思ふ然れども

容易に買人なり或時童子一人来り是を買ふに價を

以り父母の忌日に供養の料に充ちし佛前小至る小

件の存を多くあり依り知ぬ如来貧女に純孝の志を

感し自介以来へを薬師と云とあり

時其祈願成就し報賽とせ

蒲冠者 範頼靈牌 堂神は置其牌面は太寧寺殿道悟大禪

彫付 定門神は裏に範頼公建久四癸丑年八月と

範頼墓 本堂の後の山麓あり高さ二尺六七寸あり

又頼朝子朝子伊豆小越景時父子三人五百餘騎ゆく修善寺に押寄せ

範頼ハ或城ノ小祠ニ大口計ノ少くも一ノ差詰引結散々射ハハ
 其後景時煙を静メ範頼ノ焼首取リ倉小持テ頼朝ニ呈セマツル
 とあり鎌倉志ニ云ク予役ニ此地小築一を村議トあり

題 太寧寺六首

寺樓一抹晚江煙	朝送鐘聲落釣船
老矣身心機事外	間鷗容我社中眠
殘曉香消拍子煙	一老來無夢越漁船
聞君去借江村宿	越風隨岸幾移船
六浦遙連三浦煙	月落前灣猶未眠
興來撐棹竊佳處	雪後蘆花月滿船
山街夕日水籠煙	幾人能得一菴眠
蓋世功名身外事	還愛華亭載月船
衲衣懶惹御爐煙	三山翠映白頭眠
晚興遲留江上寺	失墜危於灩澦船
功名盖世畫交煙	白沙翠竹閉門眠
一錫歸來楓外寺	

當寺書院ハ北向小瀨戸の入海を眼下臨ク風光殊小

勝れとて寺寶ニ範頼自筆古奇の懸幅及び陣中用

らしと云長刀一振あり

宮根権現社瀨崎の東室本村あり又民家の間ニ犬樟の

老樹あり

雀浦同所の南北出崎を以菅神の小祠あり故ニ土人ハ

天神崎とも稱ニ此地の海灣と浦の江と云

中着巖同所絶壁の下ニあり大ニ二間四方斗石盤石あり潮尽

根附巖同所百歩を隔ク西南の方ニ崖下ニありと云

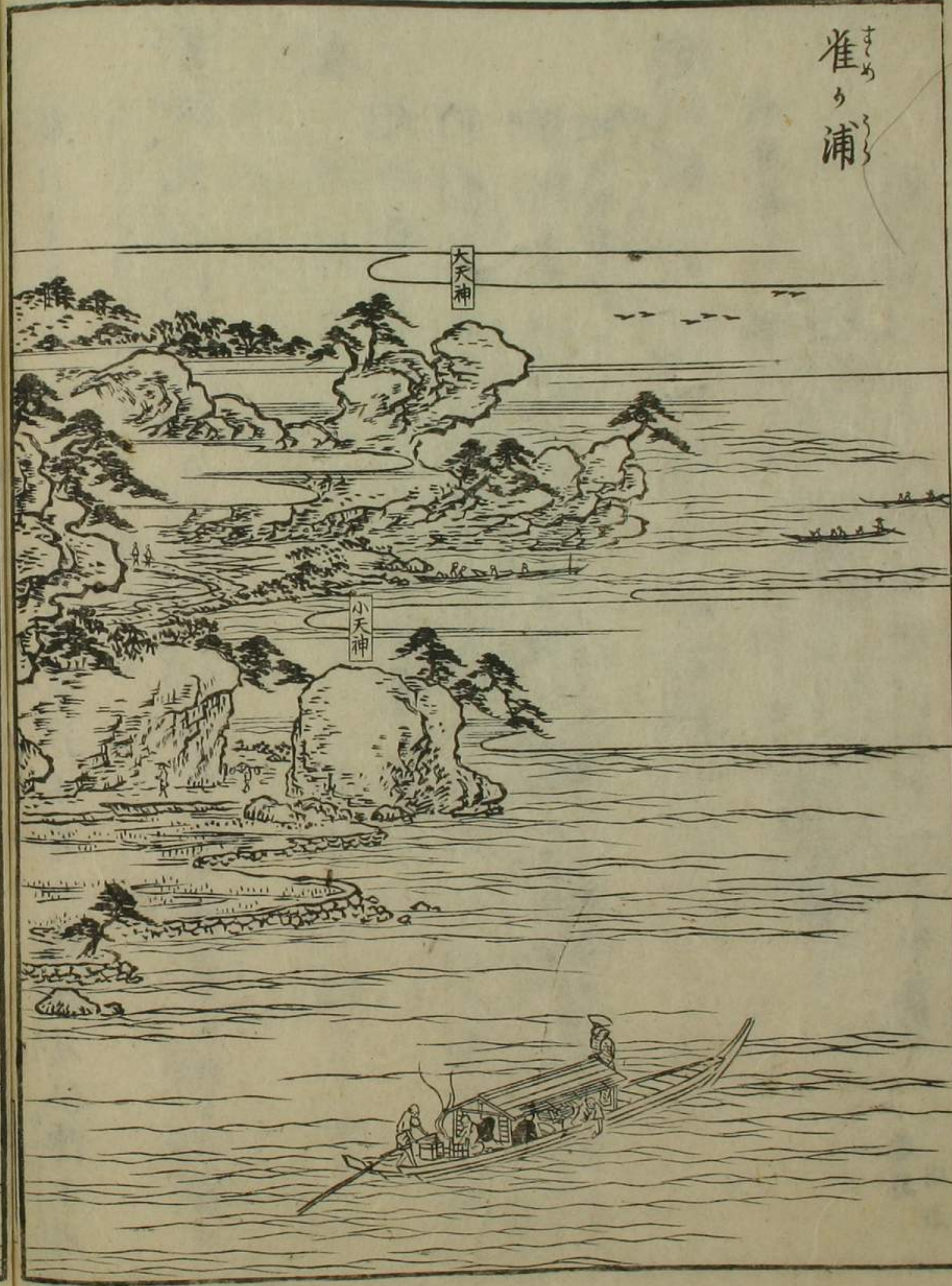
前ノ帳着岩ニ

瀬戸湊刀切村の南の入海と云

田國雜記

浦川の湊といふ所あり... 瀬戸湊の湊といふ所あり...

直與 准后



雀ヶ浦

大天神

小天神

鳥帽子島 同所東の出崎の小島との形状鳥帽子に似
たる故小名とせり

鎌倉記行 名原ノ海とのみちとそと志す

終夕小派を基ぬる鳥帽子の沖より西き風折やれ 浮庵

夏島 同所東にあり長三町餘を横一丁計此小島なりと

里人云く玄冬えんとうの雪ゆきとよへとも積つみるゆりなりと云へり

鎌倉記行 夏島を名のとなりり是時ハありと

三冬さんとうの降ふり白しろを此こゝにありぬるゆり多おほのなる清きよ人 浮庵

猿島 夏島の東南にあり五丁四方をあり

裸島 同所二三町を離れる小島なり

按あ深庵ふかゐん和尚おしょうの法ほふ念ねん記き行ぎやうに笠島かさじまと云ふ名と擧あげて平ひら泳えい小

かきしりや基と云ふ夕ゆふ時ときぬるぬる人ひとありと云へり
かくあれともは地ちに笠島かさじまありと云ふ人ひとありと云へり
中ちゆうと突つくくわくわと云ふ人ひとありと云へり

甲香 此れハ金澤の名産なり兼好法師の徒然草に甲

香ハ螺貝らがいの様ようなるる小くく口の程ほど此細長こほろゆき出でる

貝かいの蓋がけなり武蔵國むさしのくに金澤かねさわと云浦うらありと云へり野の槌つち小こ今いま金澤かねさわ

を尋たづねるはさといひまははぬとも云と云へり

